

俳句雑誌

令和八年九月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九巻第九号

水 明

2026 9月号



《今月のかな女》

野分の灯一つに寄りし母子かな

『龍膽』所収 昭和三年

長谷川かな女

この句の前年一月には最愛の母が歿し、この年七月には、旅先から帰京した夫の零餘子がチブスの疑いで入院し、同月二十七日夕刻、帰らぬ人となった。

更に同年の九月十三日、想い出の詰まった柏木の家が全焼するという重ね重ねの不幸に見舞われることになったのである。

本句は、火災の後の狭い仮宅で、かな女と子の博が遭遇した台風の夜の様子を詠んだものだと思う。飾り気のない部屋の薄暗い電灯の下で、不安気に肩を寄せ合っている二人の姿が、在り在りと浮かんでくる。風が弱まり東の空が白んでくるまで、我が子をしっかりと抱きかかえていたかな女であった。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

蘭 鑄や舞台衣装はこれと決む

大橋迪代

季音月

睡蓮のたれも知らない夜の色

正木萬蝶

季音花

四 疊半無断で覗く大西日

渋谷きいち

水明集

老舗へと四葩を辿る小網町

杉浦千祐

鼓笛集

紫陽花や父へ怒りはありません

吉川拓真

山紫集

卓上の紫陽花の背を見る昼餉

曲淵徹雄

水 明

令和 8 年
9 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

屈む姿（作品）

階調無限（近詠）

色（近詠）

百尺竿頭 主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」（同人作品）

季音「月」（同人作品）

季音「花」（同人作品）

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

句集喝采

俳誌望見

山本鬼之介

内田恵子

大場順子

五明昇

檜鼻ことは

大橋迪代 大場順子
大村節代 ほか

正木萬蝶 日高道を
松宮保人 ほか

渋谷さいち 染谷風子
梅澤輝翠 ほか

岡田美幸

網野月を

菅原卓郎

梅澤輝翠

33 32 30 29 24 19 12 10 8 7 6 4 1



☆新珠賞受賞者ノオト

○自選二十句

語感とリズム感のハーモニー

○自選二十句

遅咲きの花は大輪

皆川 更穂

網野 月を

穴戸 洋子

五明 昇

水明集

杉浦千祐
倉田星歩

本橋稀香
ほか

水明競詠のお知らせ

作品鑑賞

水琴窟 (水明集七月号鑑賞)

山紫集

山紫集作品評

鼓笛集・作品評

水明例会報・各地句会報

風声

りんどう忌のご案内

水明塾のご案内・発展基金御礼

後記

石井喜恵

網野月を

池田雅夫

山本鬼之介

69

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

屈む姿

山本鬼之介

巖かに大名時計夏の暁

虫干や若しやと思ふ空模様

懐メロの飛び交ふ宴夏旺ん

睡蓮にかな女を真似て屈みけり

山嶺を法螺渡りゆく大暑かな

団扇太鼓の勤行哮る夏の果

打水やむかしながらの隣組

風を切り模型帆船秋近し

階調無限

内田恵子

絵具混ぜ自分の色を探す春
卯月野や和名の色のものがたり
魂の色は何色早苗月
でんぐり返し色のざわめき濃き夏野
水平線階調無限の虹の立つ
伝統の色を探して枯野ゆく
色白の家庭科教師鯽起し

虹は七色だと知っている。外側から赤橙黄緑青藍紫。家の傍のことも支援センターのシャッターには五色の虹。橙と藍がない。
昔の人はどう見ていたのか。江戸時代の浮世絵に虹はほとんど登場しない。描かれた虹は淡く三色位。虹の色の数は明治以降ニュートンの七色が西洋文明と一緒に入ってきたからだ。
世界をみるとドイツ、中国は五色、ロシア、インドネシアは四色。沖縄は二色。明色赤と暗色黒か青。虹はグラデーションだから何色というのは難しいはずなのにみんないろいろな数に見ているようだ。決めつけずに自由に見て、多様性が共存している世界だ。
日本の虹は七色だというのは、今でも教科書などに取り上げられているからようだ。

色

初釜や秘色の皿に菓子を添へ
 菜の花に菜の花色の夜明けかな
 渦潮の青をほのかに桜鯛
 メット脱げば黒髪ほどけ若葉風
 薔薇真つ赤フジコ一途のキャンペラ
 緑蔭に白楽天を朗誦す
 母の色みつけて嬉し実紫

大場順子

オートバイに乗った思い出
 四十代に夫と一緒に走ろうと言
 ったのでオートバイの小型免許をと
 りCBX一二五カスタムに乗って
 ました。その頃二輪同志ですれ違
 う時は道中の安全を願いビースサイン
 を交わしていました。免許をとった
 ばかりの時は片手が離せず受けても
 返せませんでした。すぐに出来る
 ようになりばつちり返せた時は嬉し
 いものでした。
 ある日夫のオートバイのタンデム
 シートに乗った事がありました。も
 しかして大転倒した時には子供達を
 路頭に迷わすことになるので一回き
 りで止めました。やはりソロで走る
 のが一番です。
 ある時ツーリングの人達が次々に
 バイクを下りている光景に出会った
 事がありその中である人がヘルメッ
 トを脱いだら、長い黒髪がほどけて
 風に揺れました。えっ女の人だつた
 んだと思いかっこいいなと感動しま
 した。
 三年くらい乗り大学生だった息子
 にあけました。
 オートバイは風を切る体感が快く
 風になれた日の楽しい思い出です。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五 明 昇

六月号

さくら咲け咲け馬上軍扇高高と

三月二十九日に熊谷市で開催された水明春の吟行会での主宰詠。熊谷駅北口に設置されている熊谷次郎直実像は、北村西望氏が渡辺華山の「直実拳扇図」を元に制作したブロンズ像で、一の谷の戦いで、馬上から扇を挙げて平敦盛を呼び止める姿を表している。台座には「熊谷の花も実もある武士道のかおりやかし須磨の浦風」（西望作）のレリーフが光る。

記念日の無疵の空よ揚雲雀

句中の「記念日」は五月三日の憲法記念日であろうか。敗戦国日本にとって、国民主権、平和主義、基本的人権を定めた新憲法の施行はまさに驚天動地の大転換で、あの日から平和日本の確かな歩みが始まった。晴れ上がった空に、揚雲雀のさえずりが聞こえる。「日本国憲法の施行を記念し、国の成長を期する」祝日の趣旨を改めて噛みしめる一日だ。

演目の江戸文字きまり風光る

今春も歌舞伎界では、中村屋一門が全国を巡る「春暁歌舞伎特別公演」や、「四月大歌舞伎（歌舞伎座）」など各地で華

やかな公演が開催された。ところで歌舞伎の外題や看板などには、骨太で威勢がいい江戸歌舞伎の感性をデザインした「勘定流」の文字が使用される。千客万来を願って杵一杯に隙間なく描かれるのが特徴で、大入り満員間違いなしだ。

シーソーの支点力点山笑ふ

シーソーは中央の支点を軸にして、左右の重さと距離の積が釣り合うことで動く仕組みで、「てこの原理」を学ぶための物理モデルとしてよく用いられる。かつて公園や学校の遊具の定番だったシーソーが、安全基準の厳格化で減少しているのは寂しい限り。板の片方に二人の小さい子を乗せ、片方を大きい子が操る様は、山笑ふの季語にぴったりだ。

忍法かくや霞隠れと洒落てみる

水蒸気が多くなる春には、いたるところに薄雲のように霞が立ち込めて来る。この霞に包まれて忍法霧隠れならぬ霞隠れと洒落込んだ遊び心溢れる一句だ。ちなみに講談や立川文庫で有名な霧隠才蔵は、真田幸村に仕えた最強の忍者集団「真田十勇士」の一人で、甲賀流の猿飛佐助と並び称される伊賀流忍術の使い手として広く知られている。

七月号

凱旋の将の気分ぞ薔薇の門

五月に入ると各地のバラ園から芳しい開花の便りが届き始める。バラには春咲きと秋咲きがあるが、春のバラは花が大きく、株いっぱいに一斉に咲き誇るため、園は一年で最も美しく華やかなシーズンを迎える。掲句は、蔓バラを絡ませて花のトンネルとした豪華なバラアーチをバリ・シャンゼリゼ通りのエトワール凱旋門に見立て、門をくぐる作者をナポレオン・ボナパルトに擬したロマン溢れる一句だ。

麻のれん乙に文豪記念館

三鷹市立山本有三記念館は、『路傍の石』などで知られる同氏が昭和初期に実際に暮らした洋館で、ステンドグラスや暖炉など、当時のモダンな生活や文学の世界を実感できる。母屋の入口には「山本有三記念館」と染め抜かれた格式ある麻のれんが掛けられている。また同氏の出身地・栃木市の「山本有三ふるさと記念館」でも入口に大きな暖簾が掲げられており、往年の文豪の「和魂洋才」ぶりにも想いが及ぶ。

夏草の毘の出来映え「かも」を待つ

生い茂った背の高い草を互いに結び合わせ、通りかかる人の足を引っ掛けて転ばせる昔ながらの悪戯や仕掛けを「草結

び」と呼ぶ。歴史的には忍者が敵から逃げる際、簡易な毘として使われたと言われ、昭和中期頃まで里山や空き地で、子供たちが隠れんぼや陣取り合戦の際によく作っていた伝統的な遊び（悪戯）の一種。仕上りは上々、毘を作り終えて、物蔭に「かも」を待つドキドキした緊張感が忘れられない。

風雲や青葉盛りの五稜郭

かつて戊辰の役最後の箱館戦争で、榎本武揚、土方歳三が率いる旧幕府軍の最後の砦となった五稜郭。この日本初の西洋式城塞は、今は国の特別史跡に指定され、千五百本が花を咲かせる桜の名所として名高い。やがて桜の季節が終わると青々とした新緑に包まれ、隣接する五稜郭タワーの展望台からは庄巻の「緑の星型」が鑑賞できる。風雲の立つ函館に佇ち、歳月の移ろいに想いを致した一句であろう。

網元や鯨御殿の寂しき夏

鯨御殿とは、明治から大正時代にかけて北海道の日本海沿岸で隆盛を極めたニシン漁で、莫大な富を築いた網元たちが建てた、豪華な居宅兼漁業施設の総称である。しかし無秩序な乱獲と海洋環境の変化によって漁獲量が激減、昭和中期にはニシンは「幻の魚」とさえ呼ばれるようになる。かつて殷賑を極めた鯨御殿は、博物館や文化財として北海道の歴史を伝える貴重な語り部として命脈を保っている。

ゆずり葉

◆季音七月

檜 鼻 ことは

千年の杉に抱きつく夏帽子

大橋 勉代

鹿児島県の縄文杉、富士浅間神社の富士太郎杉、熊野本宮大社旧社地の大斎原、私は未だ写真でしか見たことがないのですが、元氣なうちに何とか訪ねてみたいと願っている場所です。

樹齢千年という悠久の時を生きてきた杉は、ただ大きいだけでなく、歴史や信仰、生命の深さを象徴する存在であったことでしょう。句は、千年杉の圧倒的な存在を前にして、理屈ではなく「抱きつく」という行為により自然への畏敬の念を語っています。その無邪気さがとても心地よく、壮大な自然への畏敬と、夏の日の素朴な喜びが、美しく伝わってきます。

叢霞記憶は消えぬ拉致の浜

近藤 徹平

新潟県新潟市、柏崎市、佐渡市、福井県小浜市に於いて拉

致事件が起きたのは昭和五十二年から五十三年にかけてのことでした。事件が起きてから既に五十年近くの年月が経とうとしています。平成十四年、日本人拉致被害者の内、五名の方が帰国されましたが、それ以降、新たな被害者の帰国は実現していません。「叢霞」は霞が幾重にも重なってたなびく様子を表す季語、景色を柔らかく包み込み、時の流れや記憶の薄れをも感じさせますが、その後に続く「記憶は消えぬ」という強い言葉によつて、決して消えることのない作者の力強い思いが告げられます。「拉致の浜」は、今も尚、静かな海辺でありながら、理不尽な事件が起こった現場として深い悲しみを背負っています。拉致被害者全員の無事の帰国を願うばかりです。

亀鳴くや月のうさが耳を立つ

河野はるみ

お伽噺の絵本の一頁を眺めているようです。実際の亀は音を出すことはあっても声帯を持たないので鳴くことはありま

せん。しかしながら、遊び心と想像力の賜物により、愛されてきた季語です。この「亀鳴くや」により、一気に現実世界から「おとぎ話の静かな夜」へと引き込まれます。そして、地上でひっそりと鳴いた亀の微かな声を、はるか遠く、宇宙の彼方にある月に住むうさぎが聞きつけます。「おや、地球の亀さんが鳴いたような……？」そんなふうに、月のうさぎが地上をそっと見下ろしながら、耳を澄ませる姿が目に見えます。誰も聞いたことのない亀の鳴き声と、誰も触れたことのない月のうさぎ。この二つの創造物が響き合うことで、「春の夜は、もしかしたらこんな不思議で優しい秘密に満ちているのかもしれない」と思わせてくれます。大人の遊び心を楽しませていただきました。

鍬入れて土の声聴く穀雨かな

荒井 俱子

穀雨は、春の最後の節気。この頃に降る雨は、種をまいた作物の発芽や生育を助けるため、古くから農耕にとって最も大切な雨とされてきました。このころになると、種まきや田植えの準備が始まり、山々の若葉がいつそう鮮やかになり、春の雨がしつとりと大地を潤す風景が見られるようになります。

作者は、鍬を入れたときの土の柔らかさや湿り具合、立ちのぼる土の香り、鍬に伝わる感触を、「声」として受け止め、農作業という具体的な営みを通して、穀雨の頃の情景を描い

ています。長く土と向き合ってきた人だからこそ感じ取れる自然との対話がそこにあるような気がいたしました。

羅にきりりと博多通し柄

梅澤 輝翠

夏の装いに宿る粋と品格を、簡潔な言葉で鮮やかに詠まれています。羅は柔らかく涼しげな素材ですが、「きりりと」という一語によって、単なる優美さではなく、着こなしの端正さや凛とした気配が生まれます。姿勢を正し、帯をきちんと締めたお人の気品や佇まいが目に見えんてくるようです。

鍬当たる小石の音の冴返る

池田 珪子

こちらは早春の畑仕事を詠んだ句です。寒い冬が終わり、ぼちぼちと始める農作業。春めいてきたと思えば再び寒さが戻るころ、土はまだ固く鍬を握る手にも力が入ります。

鍬が土中の小石に当たり「カン」と乾いた音を立てる、畑仕事をしていると誰しもが経験するありふれた出来事です。作者はその何気ない音に季節の変化を聴き取っています。寒さの戻った朝は空気が澄み、金属と石が触れ合う音がひときわ鋭く響きます。その響きが「冴返る」という季語と見事に呼応して、鮮やかにその場の状況が伝わってきます。

土を耕す手の感触、鍬の重み、小石の硬さ、そして音の余韻、俳句ならではの感覚の鋭さを感じた佳句です。

季音雪

瑠璃蜥蜴 大橋 廸代

機体右へ傾ぎて麦野しかと見ゆ
香水のつよき空港ここ独逸
カウ・ベルを撥ね返しをる雪溪よ
ヨイトマケの唄にしどろの瑠璃蜥蜴
蘭鑄や舞台衣装はこれと決む

夕 風 大場 順子

夕風や沖の巨船は時を止め
青紫蘇の香や縄文の風を呼ぶ
蒲団ごと西日の赤子次の間へ
一本決めし残心涼を呼びにけり
雲晴れてお花畑見ゆ涼しさよ

空 梅 雨 大村 節代

苔の花膝つきて取る女人堂
片恋の人を横目にアイスクリーム
空梅雨や影と一緒に下校の子
額の花洗ひ晒しのズック靴
落日や浮巢の卵金色に

青 嵐 菊池ひろこ

銀河鉄道 近藤徹平

青嵐案内されゆく長廊下
夜の部に連獅子街に青嵐
寄りきたる麒麟の首に若葉風
五月雨や旧居の音は高かりき
暗がりの手摺磨かれ旧家夏

我独り銀河鉄道待つ露台
「百穴」に原人の翳夜半の夏
田の真中若竹覆ふ一軒家
露台発ジャンボ機を追ふ竹とんぼ
夏季講座脳医学者の「バカの壁」

仮 枕 五明 昇

電 飾 の 境 延 昭

黒南風や天地に伸ぶる街の丈
梅雨晴へ雨読の窓を開け放つ
せせらぎにト書を添ふる河鹿笛
叶ふなら鳩の浮巢の仮枕
ナプキンの白帆を解く夏料理

電飾の赤疎ましき五月闇
篋^{たかむら}の版^{はん}図^とにひかり今年竹
蔵壁に質の一文^{もん}字^じ蔦^{つた}茂る
向日葵や真つ正直と言ふ讃辞
夕涼や三味調弦の一の糸

半夏生 島津初花

餃子百個折り目正しき半夏生
凌霄花浦和に親しき人ばかり
ソーダー水グラスに透くる幼な友
炎昼を軍神めきし草刈女
老人に一人前とや鰻井

五竜の滝 鈴木康世

良き川の流るる町の大西日
駅を出て西日真つ向ふ避けがたし
幸呼ぶてふ光る縞目の青蜥蜴
音を浴び飛沫浴び佇つ五竜の滝
夏座敷柱時計の明治の音

金魚 十倉和子

すいすいとゼブラゾーンを金魚玉
診察待つ玻璃の金魚に息合はせ
ゆらりゆらりと裸電球金魚掬ひ
淋しさに泡を一つ夜の金魚
ほととぎす秘湯の夜明け独り占め

すつぽん 鳥羽和風

帰省子の波を枕に寝る浜辺
色褪せし畳懐かし帰省かな
鯉こくを土用太郎の湖畔亭
すつぽんの生き血は馬力土用明
日輪に容赦は非ず大旱

黒南風 永野史代

黒南風や魚臭のこもる築地裏
腕太きタトゥーのをとこ黒南風
妻置いて来し後悔や夕河鹿
河鹿笛今宵一人の旅籠にて
夢の中父と出会へり南吹く

沖縄忌 町野広子

西方へ雲の流るる沖縄忌
今一度靴紐堅く雲の峰
白南風やグーの形のクリームパン
恰幅良き店主黒南風の老舗
戻る娘を駄まで送る河鹿の夜

青葉風 松井由紀子

紫陽花や鐘楼寂びし山の寺
縞目よき蛇に出会へり御祖みおやの地
マロニエや美術クラブの版画展
参道へ出てほどけたす蟻の列
若葉風ゆるく人待つ昼下がり

結願 丸山マシミ

黒南風やルドマリアの潮じめり
河鹿澄む問はず語りの峡の宿
結願の寺に待ちゐし瑠璃蜥蜴
梅雨明や磯笛ひよーと志摩の海
山懷に寄り添ふ五軒梅雨明くる

川 音 茂木和子

苔の花末社の裏の日向かな
無住寺と云へど人影苔の花
黒南風や不機嫌つづく木戸の鍵
川音はバックコーラス河鹿鳴く
浅酌の耳の捉へし河鹿笛

半 夏 生 森川義子

公園に研師来てをり夏の夕
目礼に目礼返す夏至の夜
独り居の秒針刻む夏至の夜
葉脈の流れよきかな半夏生
遠くへは行かぬ旅なり夏帽子

大 夕 立 森本早苗

大地轟く六甲山の夕立
夏越の被脇の浜風心地よし
ささゆりの清楚な香り有馬籠
振り花喜喜として摘む卒寿前
童心に帰り金魚を追ひ詰める

川のある下町 山中みどり

鳥越の千貫神輿若葉風
祭伴天毗に紅の女伊達
梅雨明けの青空映し潮止り
花火待つ駒形橋の化粧塗り
人力車の母娘手に持つ風車

別所沼公園界隈Ⅲ 網野月を

今年竹 石山かつ子

誰ですか忘れものです
蜥蜴の尾
ボルダリングする心なるなめくぢり
夏木立雨を含みて息深し
ぢつと見れば透明になる実蠟梅
山梔子花錆び金団の言はぬ色

浮遊感 石井喜恵

夏至の昼予定なき日の浮遊感
黒南風や水の澱みし用水路
木の橋の反りしなやかに河鹿鳴く
木道をくの字くの字に菖蒲園
尖塔に架かる光暈梅雨明くる

疲れ 内田恵子

無位無冠生きて米寿や五月富士
羽衣のやうにふはりと蛇の衣
朝の魚鼓ひびく寺領や今年竹
抜きん出て風を呼びけり今年竹
荒壁のひびこまやかに梅雨湿り
走り根は大地のレリーフ苔の花
夾竹桃怖き話の花一匁
詰問にのらりくらりと額の花
百合の香や突如疲れの沸騰す
露天風呂の長き階段河鹿笛

螢の夜 梅澤佐江

指より漏るる淡き明滅螢の夜
 耳飾り外す素顔の明易し
 彼の日のままに浜昼顔や九十九里
 海鼠壁残る城下の道をしへ
 直向きな球児の瞳玉の汗

☆ ☆

最近の座談会

名句集を探る

原満三寿『俳屏の朝』

対馬康子『百人』

川森基次

『あやまちに似て』

◎今月の華

内野義悠／千葉喬子

◎巻頭三句

井上弘美／尾池和夫

岡田由季／土生依子

中尾公彦／河村正浩

◎俳句と短歌の10作競詠

千野千佳＋服部真里子

セタまつりレポート

◎師と弟子、弟子と師

村上鞆彦＋若林哲哉

◎今月のハイライト

「道」「春耕」

「朴の花」「家」「鴻」

大西朋

田島健一

なつはづき

司会 筑紫磐井

◎好評連載

伊野孝行

人はなぜ風景を描くのか

小川楓子

俳壇ランドスケープ

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

橋本喜夫

俳句のレトリック

藤村公洋

俳句のつまみ

神作研一

てのひらの江戸

——古典籍を旅する

堀田季何

諸家書架

石井隆司

たもとほる

俳句よみやま話

山本潔

一望百里



2026年9月号

8月18日発売 定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

夜の色

正木萬蝶

金継ぎの有田の夫婦梅雨の月
西郷どんの遠流の島や大西日
鯉になる野望に燃ゆるあの金魚
妖かしのくのいちめきて瑠璃蜥蜴
睡蓮のたれも知らない夜の色

微妙な距離

日高道を

老人と彗星を見る夏の宵
遠雷や二人の距離は縮まらず
昨日まで夢を見てをりサングラス
提琴の弦の弛みや半夏生
村雨や袋小路に迷ひ込み

蟬時雨 松宮保人

一滴の里の文楽風薫る
風薫る竹人形や「瞽女おりん」
砂埃り上げて夕立の道叩く
産土の杜を占めたる蟬時雨
夕焼けて黒き孤舟の波静か

蜻蛉生る 青木鶴城

ナフサ由来の袋の乱舞青嵐
父の日やいつか交はる双曲線
汗拭ひ小さな嘘の太りたる
片蔭や人の暮らしに陰と陽
毒の世に蜻蛉生るる平和かな

野良仕事 檜鼻ことは

教室に明るき笑顔更衣
青空や振り向きもせず夏燕
テールに夢二の画集さくらんぼ
標柱に桑名の渡し雨蛙
蚯蚓出づ先は急がぬ野良仕事

一つ星

曲淵 徹雄

五月富士悠然とひく薄き裾
小雨ふる鎌倉五山半夏生
桜桃の種の落ちつく手塩皿
夕星を仰ぎ独りのバルコニー
誰へともなく待合室の扇風機

八月来る

池田 雅夫

フライパンの焦げたる匂ひ八月来る
音もなく追ひ越してゆく風は秋
藁屋根にしばし留まり盆の月
丹田にずしり四尺玉花火
鳳仙花子の失恋のとばつちり

七月十四日

河野 はるみ

通せん坊見返る蜥蜴のの道
浦賀水道の風音届く浜昼顔
水琴窟の調べ届きて宵涼し
月あかりに螺鈿めく肌花水
衛兵の直立不動パリ―祭

熊野古道

原田 自然

蔵王堂の大額仰ぎ草いきれ
大峯の女人禁制草いきれ
山は八重熊野の山並草いきれ
やまひるの馴れ馴れしきや草いきれ
草いきれ熊野古道の石畳

帰り船

松島 寛久

夕立に追はれ波切る帰り船
蟬しぐれ祝詞かすかに宮の杜
広重の夕立の橋や傘すばめ
幽玄の緑夜へ鼓「車僧」
指先の合掌に夕焼明日は吉

かずら橋

大塚 茂子

眼下には万緑の崖かずら橋
天花粉息やはらかく子の寝顔
墓道にねぢ花ふたつ姉妹かな
師はいつも正座くづさず熟れトマト
ベランダにスローライフになりし夫

小さき者たち

福田 千春

存へて金魚すつかり主の顔
泡ひとつ吐くは金魚の嘆きかな
目が合へば吾を一瞥して蜥蜴
石垣のとかげ忍者の逃げ足で
居住地は小田原城壁るり蜥蜴

天 瓜 粉

原田 秀子

天 瓜 粉うつすら残る蒙古斑
逃げ回る稚のおしりに天瓜粉
振花や旋毛曲がりも稀にゐて
一推しのトマトその名も桃太郎
些と洒落て今朝は露台でカプチーノ

姉との思ひ出

松山 清子

螢 追ふ姉の嫁ぎし寺の濠
本堂への畳廊下や青葉風
大鍋の色濃き麦茶おもてなし
朝夕に植田を渡る寺の鐘
姉に貰ふ赤毛のアンにひたる夏

白 雲

荒井 俱子

釣堀の水面に泳ぐ白き雲
川べりに交はす会釈や忘れ草
白南風や干網高き漁師町
白南風や琉球菓子をさくさくと
学舎を陸の孤島に青田波

茂る 草

飛永 鼓

のびのびと休耕田の茂る草
訪ねたる村静かなり草茂る
降り残す雨を見上ぐや草茂る
山桜桃口に含みて遅い昼
若狭富士の際立ちをりぬ夏の天

風鈴ちりり

石川 理恵

人を愛し人を嫌うて桜桃忌
たつぷりと慈雨を含みし茅の輪かな
草花の図鑑を広げ夏座敷
風鈴ちりり推理小説読みをれば
ステンドグラスの色を変へたる西日かな

ジョッキ

野口和子

素麵や待ちてくれたる友のあり
生ビール百三歳の手にジョッキ
息呑むや狭庭横切る蛇長し
一輪に淡き紅あり沙羅の花
庭師着るベストの背なに扇風機

抜き胴

保坂翔太

親不知崖攀ち登る大卯波
夏みかんソフトボールのやうに投げ
先鋒の抜き胴石火青嵐
父の日や吉川英治記念館
頑な男と言はれ心太

星を待つ

横山君夫

郭公や森に鎮もる五色沼
家宝などなくも露台や星を待つ
薔薇百花這せて上る二階まで
巡り来てまた銅賞の薔薇の前
思案なほ二転三転明易し

熱帯魚

笹本啓子

情熱の踊りはリンバ熱帯魚
今生の敵とばかり蠅を撃つ
梅雨晴間棧橋うむる太公望
夏蜜柑クレーターとはこんなもの
ランドセル浮かせて走る梅雨の明け

トライアングル

石田慶子

青嵐しばし足とめ風見鶏
予報士が厳かに言ふ梅雨入かな
梅雨最中やりたい事を箇条書
くちなしの花鏝びて窓閉づる母
緑さすトライアングル揺らす庭

初鰹

熊倉千重子

もう一本晩酌すすむ初鰹
胸に抱く男の子ぷりぷり初鰹
緑さす猿が首まで湯につかる
十葉の臭ひ残る手厨事
嫌はれし十葉白を自己主張

藪蚊襲来

田中章嘉

夕暮に藪蚊襲来手に脚に
纏ひ付く羽音も憎し夜の蚊は
入梅や買ひ置くほどに食も出ず
夕立や相合傘で濡れ帰り
渴水も一先づ終り稲の風

初螢

西浦千枝子

星よりも光すがしき初螢
ほうたるに誘はれライダー旅立ちぬ
金魚鉢に目高泳がせはしやぐ子等
有線放送静かに流れ螢飛ぶ
サマーセーター編む手に皺の深きかな

向日葵野

下川光子

起きぬけの向日葵勝手気儘なり
我勝ちに向日葵顔を日に晒す
陽を追うて向日葵の首また伸ぶる
戦火まだ眼裏に黄の向日葵野
旅立ち梅雨明を待つ大あくび

大賀蓮

葛城千世子

「たま電車」にふんはりソファ冷房裡
噴上げの出迎へV形のダイヤ
蓮の葉一面歩きてゆけさうな
蓮の花一緒に撮るよ音したよ
蓮の葉の水玉揺らす子の遊び

誤植訂正

二〇二六年八月号三三頁

慎んでお詫び致します。

正 (岡本祥子、南條さわゑの二名は欠席)

誤 (岡本祥子、南條さわゑ、畑宮栄子の三名は欠席)

季音花

洪 団 扇

洪 谷 きいち

四 疊 半 無 断 で 覗 く 大 西 日
海 の 日 の 昼 は 海 軍 カ レ ー な り
大 店 の 軒 借 り て 蟻 雨 宿 り
洪 団 扇 ば あ ば の 語 る B 29
照 れ 隠 し 虚 空 に 遊 ぶ 団 扇 か な

さんさ時雨

染 谷 風 子

児 雷 也 に 負 け ず 変 身 雨 蛙
三 つ 指 を つ い て 平 身 青 蛙
宵 待 ち の 花 街 の 渴 き 水 を 打 つ
紹 羽 織 や カ イ ゼ ル 髭 に 五 つ 紋
手 踊 の さ ん さ 時 雨 よ 船 遊

浜 昼 顔

梅 澤 輝 翠

紫 陽 花 や 明 日 は 娘 の ウ エ デ ィ ン グ
熱 き 砂 地 の ど こ ま で 咲 か す 浜 昼 顔
立 木 裂 く 火 柱 あ げ て は た た 神
香 を 放 ち 空 輪 で 届 く メ ロ ン か な
蜻 蛉 生 る 翅 開 く ま で 街 眠 る

水 無 月

越 田 栄 子

畦 に 立 ち 青 水 無 月 の 風 を 受 く
狭 き 田 に 曲 が り 癖 つ く 青 田 風
蹲 踞 に 青 水 無 月 の 風 の 色
水 無 月 や 熊 手 の 描 く 礫 の 波
ベ ラ ン ダ の ハ ー プ 摘 み 取 る テ ィ ー タイ ム

夏 の 余 力

菅 原 卓 郎

薰 風 の 飾 緒 ま ば ゆ き 儀 仗 兵
奥 能 登 の 風 籟 あ を き 今 年 竹
手 風 琴 に は づ む 歩 調 や パ リ ー 祭
夕 風 の 磯 根 漁 る さ つ ば 舟
伝 書 鳩 の 還 る 入 り 日 露 台 か な

サングラス

新

曆文

西日浴び厩舎へ帰る馬の列
海の日や海軍の叔父安らかに
海の日や芭蕉を辿る五大堂
吾子と寝て団扇の風や子守唄
声までも別人になるサングラス

沼

池田 珪子

跳ね上る鯉に動ぜぬ子鵲かな
威嚇する時の小鵲のするどき眼
鵲の子の時折脚をふるはせる
親の水脈兄弟の水脈小鵲追ひ
鵲の子の脚の黄色の濃くなりて

今年 竹

清水 桂子

序の舞を舞ふがごとくに今年竹
五感もて味はふ椀や鯉の宿
生真面目を背負ふ不器用夏の月
空元氣出して乗り切る極暑かな
短夜や夢に入りくる深夜便

青 梅

山 戸 美子

山坂の穴に青梅まだ硬し
青梅の瓶揺すりては得意顔
青梅を貰ひ追はるる一日かな
復員や抛り所なき夏野行く
登山地図広げ復路を相談す

風になり

西 幅 公子

風になり月山下降夏スキー
凡庸なれど直向きに咲く日日草
近づけど逃げぬ郭公考なるや
一円の代田に祈る豊作を
仲間の絆一糸乱れぬ蟻の列

飾り紐

野 村 美子

空曇り佐原の街に花菖蒲
螢がり半巾帯の飾り紐
若竹そよぐ桂離宮の表門
川沿ひの散歩の小径今年竹
朝立ちの漁船響くや伊豆の初夏

乙女の祈り

宮崎 チアキ

今年竹さはさはさと里の声
細川の流れは速し四葩かな
冷房や服不調和と言ふなかれ
壁飾る「乙女の祈り」百合の花
真つ白に飾りは一つ夏ドレス

南風

鈴木 玲子

梅雨寒しブックカフェにて試し読み
青梅雨や寺の朱印に梵字あり
目で追うてゐる我のゐる梅雨の蝶
黒南風やMRIの野太き音
白南風やケンとメリーのスカイライン

金魚

高橋 満耶子

ゆらゆらと眠りを誘ふ金魚かな
幼子の顔の浮きだす初螢
介護用ベッド届くや梅雨晴間
一階へ寝室うつし青簾
地震に揺れ更にダブルの夏台風

夏料理

森 和子

水音に京ことば添へ夏料理
透きとほるものへ箸ゆく夏料理
いけず口こつそり隠す夏料理
梅雨晴の白シャツ眩し丸の内
シの音が鳴らないピアノ梅雨晴間

世の習ひ

山岸 久美子

一族の長たる威厳女王蟻
世の習ひ働き蟻の列長し
若竹の葉擦れ音清しアルペジオ
船底のガラス越しなる熱帯魚
夏雲を脱けて降下や滑走路

魚跳ぬる

綿貫 ひさの

翩翻と市旗ひるがへる大南風
南吹くバーゲンのビラ飛び回る
籐椅子や若き日想ひ「ドーデ」読む
釣堀の夕暮方や魚跳ぬる
送り梅雨ホスピスの友は天国へ

夏の景

寺内洋子

「ちょボラ」とふ愉しき新語梅雨明くる
金魚すくひ子よりも親がしやかりきに
絵日傘も夢も回すや宝塚
はるかむかし裂かれし恋や月見草
馬の背となりし農道夕立去る

時流る

菅原真理

下車駅は午後の麦秋無人なり
紫陽花や空の青さをもらひをり
空を裂く神の一閃雷となり
紫陽花を一輪花器の余白の美
レース編む時の流れに身を置きて

祭囃子

小林京子

ポマードで調髪びたりアロハシャツ
色彩と媚態を見せて熱帯魚
微温き関係サイダーの泡だらけ
乱調の祭囃子や夜の更けぬ
一瞬の失言突然の晩夏

夕日影

岡田宣子

後シテの巴の霊や夏の夕
歩行距離伸ばす迂回や夏至の夕
老鷺や棚田に映ゆる夕日影
面長の顔かんはせ涼し菩薩かな
雷のあと一時の街モノクロに

レース編み

野平美紗子

蟻の列たどりて行けば花の蜜
梅雨の部屋孫の読む本「孫悟空」
風そよぎレースカーテン揺るる部屋
熱帯魚優雅に泳ぐ水族館
レース編みに挑戦したる高校生

螢の夜

岡本祥子

父の背や呼ぶ声届く螢狩り
呼んでみる思ひ出淡し螢狩
口ずさむ遠い日の歌螢の夜
梅雨最中次第に激し川の音
ホース干す梅雨の晴れ間の消防署

夏の旅 霜多光代

赫赫と瀬戸海渡る大西日
明易し五感を覚ます潮の鳴り
明易し渦なす海辺のホテルの灯
湯の宿にかな女を語り明早し
長男の分別顔の夏の旅

蓮の花 南條きわゑ

蓮池や未来の子らの声がする
初めてのベトナムハスに目を見張る
蓮池を眺め先祖を偲びけり
緑蔭に引かれ進むやウォーキング
梅雨出水流れきつたる孟宗竹

梅雨 畑宮栄子

五感さへどんどん鈍り梅雨に入る
胼胝^たができ吾のくせ知る梅雨晴間
大小の長ぐつ干すや梅雨晴間
山法師白き十字花天を向く
断捨離やのどをうるほす心太

五島列島 森下美智枝

三倍の羽を運びて進む蟻
空青し白砂の浜を夏帽子
駒下駄に藍浴衣着て屋形船
船下りて青葉の五島胸弾む
砥部焼の器大好き新茶入れ

夏料理 湯浅和

猫の目の蠅の動きに右左
兄嫁は氣遣ひの人柿の花
朝採りのサラダ大盛夏料理
釣堀に人多くして皆寡黙
夏料理ベランダ席の二人連れ

☆

☆

『水明誌』を繙く（水明六月号）

岡田美幸（「コールサック句会」
「現代俳句協会青年部」所屬）

薔薇の芽の真つ赤に貰ふ明日の夢 森本早苗

一読した時は「何気ない俳句だな」と思ってサラッと読んだ。しかし、その後出かけた際、実際に薔薇の芽を見た。すると、その芽が実際に赤かったので「さっきそんな俳句があったな」と、この俳句を思い出した。連想から喚起されるだけの力のある一句で、愛唱性もある。

初めてこの俳句を読んだときは、結句の「明日の夢」により、作者の希望や理想の俳句だと思っていた。俳句は結句が最終的な印象を決めると聞いたことがあるため、余計にそう思った。

しかし、初句と中七の途中の「薔薇の芽の真つ赤」は、実景に沿っており、写生であり、リアリズムもある。

よって、理想と写生を取り合わせた一句で、何気ない内容の句でありながら、観察の巧みさと俳句を作り慣れている作者の構成の上手さがあると思った。

肥後守で削る鉛筆春うらら 石川理恵

刃物類（ハサミ、ペーパーカッター、包丁など）に銘があることがある。広辞苑によると、銘とは「刀剣などの器物に付けた製造者の名」とのこと。この俳句では「肥後守」が銘にあたる。肥後は今の熊本。私もギフトカタログで包丁を頼んだら、届いてから「関孫六」の銘に気づいた。銘があると、由緒正しい感じがする上に、昔からの技術が伝承されて今に続いていると思うと嬉しくなる。

現代は刀を使う戦がないため、刀鍛冶が刀を作らなくなつた。その分日常使いの刃物が作られる。刀を使わない、平和な現代だからこそ、季語の「春うらら」の呑気さが活きる。

この俳句の字面に注目すると「肥後（熊本）を守る」のではなく「鉛筆を削る」ことに刀が使われている。鉛筆削りではなく、刀で鉛筆を削る点に、作者のこだわりや習慣や手の器用さも感じた。

現代俳句鑑賞

網野月を

拗ねるやうにおまけの和金我を見る

今井 聖

〔俳句〕 6月号・積乱雲直下より〕

シチュエーションは金魚掬いであろう。「おまけ」の意味合いを金魚自身も知っているように作者には見えたのである。作者の心境が語られているのだが、その語りを金魚に託して描出している。他に「右乳房ばかり鏡に花の夜」がある。

麦を踏み山の淡冶をうべなへり

小林 貴子

〔俳句〕 6月号・アネモネより〕

「淡冶」とはまた古風な言い回しである。中国北宋の画家である郭熙の画論に由来する用語である。画論は『郭熙画譜』に記載されて、俳句季語〈山笑ふ〉〈山滴る〉〈山粧ふ〉〈山眠る〉の語源にもなっている。座五の「うべなへり」の断定が俳句的なロジックである。他に「アネモネや襯衣を細身に新年度」がある。

魚籠覗きもらひ受けたる雌鯛かな

藤田 直子

〔俳句〕 6月号・風の果てより〕

釣り人は他に目当てがあつたのであろう。「雌鯛」を譲ってくれたというのである。もしかしたら、「雌鯛」がやけに釣れたのかも知れない。太公望の心根を鮮やかに描写している。他に「蓮の葉に乗つてゆきたし風の果て」がある。

一巡りしてきて覗く蜷の道

日原 傳

〔俳句〕 6月号・酒屋より〕

田の用水路か、散策道脇の小流れにでも「蜷の道」を見つけたのである。「一巡り」の後にふと思ひ出して覗いてみると、確かに進捗はあるのだが、そのくねくねと曲った「蜷の道」の有り様が誰かの人生に似ているような、と作者は思い当たつたのであろうか。深遠な哲学のようである。他に「酒星を謳ひあげたる李白の詩」がある。

指輪する指変へてをり夕涼み

岡田 由季

〔俳句〕 6月号・態度より〕

「指輪する指」を変えたのは他者であらう。「夕涼み」の際に認めたのである。「夕涼み」という言わば心身ともにリラックスしたところでの発見だけに、訊くことを躊躇っている

作者がいるのである。季語の斡旋が秀逸である。

時の日の動く歩道をなほ歩く

〔俳句〕6月号・問ひかけより

内野義悠

中七座五の「動く歩道をなほ歩く」はありがちなことである。筆者も勿論「なほ歩く」ことがあるし、自分が止まっただけで、その横を「なほ歩く」人物を見ることがある。そうした空間の中で観察した人間を、今度は上五の季語「時の日」が時間軸というもう一つのスキームの中に捉え直している。他に「リポスト／リポスト／リポストほうたるは何処へ」「問ひかけの果てず香水瓶に鱗」がある。

百合の香や夜を封緘することく

〔俳句四季〕6月号・巻頭句より

田中亜美

「百合の香」は悩ましい程の香を放つものである。筆者は寝苦しさを覚えて真夜中に起きたことがある。野にあってこそその花の香りなのである。「封緘」の措辞が叙景と抒情とを両立させている。

今年又高らかに打つ幟杭

〔俳句四季〕6月号・巻頭句より

稲田眸子

如何にも目出度い御句である。毎年のように飾る鯉のぼりを揚げるための「幟杭」である。地域の各宅で競い合うように立派な鯉のぼりをより高みに揚げるのである。今時であるからもしかしたら女子の為にも揚げるのかも知れない。

空重し螢に闇のまだ足りず

〔俳壇〕6月号・では又より

池田澄子

この作家のロジックには、言わば澄子語と言うべきものがあって、その澄子語には思考の過程の綾が絡みついている。その綾は決して難解ではなく、(なんだ、その道があったのか)という答えを読者に提供して呉れている。他に「わがコロあるべきところに無し暑し」「では又の又こそ佳けれ夕薄暑」がある。

花を出ですぐにわが影戻りけり

〔俳壇〕6月号・千人より

中西夕紀

桜並木の真ただ中を歩む中、我を忘れるほどの思いをしたということではないだろうか。その体験は自らの影をも失念させてしまうほどであったのだ。そして我に返ったということではないだろうか。他に「千人が起てと歌ひて卒業す」がある。

秋口を曇りがちな硝子瓶

〔俳壇〕6月号・昨日今日より

原 雅子

「俳壇」の特集で「わが家の台所季語」に即しての五句とエッセイを掲載している。他には「組板」「胡瓜もみ」「煮凝り」「塗板」の句が並んでいる。「硝子瓶」の「曇りがち」、つまり少しばかりぐもっているところに「秋」を感じたということである。日常の一コマを活写している。

春の蛾の死せり地球と抱き合うて

〔俳壇〕6月号・限りなく近くより

安達昌代

上五中七の「春の蛾の死せり」は至極強いネガティブな意味内容の措辞であるが、中七座五の「地球と抱き合うて」がしっかりと受け止めていて、一昆虫にも生き様があるような感を深くする。他に「限りなく近く触れざる桜かな」がある。

句集喝采

菅原卓郎

◆五領田幸子「花檸檬」

文學の森

著者略歴 一九三五年広島県生。一九六七年「早苗」入会、六八年「馬酔木」入会。九四年俳人協会会員。二〇一〇年「馬酔木」新樹賞受賞。二〇一三年「馬酔木」風雪集同人。

広島県の瀬戸内の島にお住まいで穏やかな島の情景を巧みに詠み込んだ句が心を和ませる。卒寿を記念した第一句集。

真珠棚波なく揺るる神迎
奥入瀬の流れを分けし岩紅葉
忠敬の地図目で辿り春惜しむ
白光の太刀魚天に釣り上ぐる

第一句、出雲の国へ旅立たれた神々が一ヶ月ぶりにお戻り為される。島の真珠棚が妙に揺れ動いている。正に「神戻」の風と共に神がお帰りになれたのである。第四句、太刀魚は潔く吊り上げられる。煌びやかな銀の鱗が太陽の光を跳ね返し瞬時身を捻るがすんなりと手元に引き寄せられる。晴天の釣行の一駒を上手く切り取っている。

研師来て刃物匂はす木の芽雨
泡ひとつ立ちて亀浮く梅雨の晴
滾々と清水湧きつぐ醬油蔵
寝しづまる島は蜜柑の花月夜

亀も長梅雨は鬱陶しいのであろう。梅雨の晴れ間に泡を一つ浮かべてその姿を見せる。泡ひとつに亀の意気込みが感じられる。第四句、夜静まり返った瀬戸内の島は蜜柑の花の天国であらう。その花が月の光に照らされてまるで宙に浮いているみたいではなからうか。瀬戸内の島ならではの一句。

◆高橋健文「一本の櫂」

文學の森

著者略歴 昭和二十六年宮城県塩竈市生。平成五年「好日」入会 小出秋光・長峰竹芳に師事。令和元年「好日」主宰継承。千葉県俳句作家協会副理事長。千葉県現代俳句協会副会長。俳人協会千葉県支部幹事。

自然災害など未来への不安が大きい世相において筆者が今できる事は俳句を作る事だそうで文字が書けなくなる迄句作りに邁進して行く強い信念をお持ちである。

少年に沈まぬ夕日かぶと虫
たぶん饒舌蝶に声ありとせば
天使魚この世のこの見え過ぎる

返り花すべて忘れてしまふ国
第一句、かぶと虫採集の少年にとつては時間など決して気にしてはいない。特に夏休みの子供には日没など歯牙にも掛けない事であらう。第二句、蝶の翅の繊細な動きを見ているに自ずとその様な想いになるであらう。声がなくて良かった。愛想など捨てよ恋猫であるならば

ただ座して一と日暮ゆく雛かな
生きてさへあればそのうち亀の鳴く
十一一面観音十一の春愁

第一句、恋猫には愛嬌を振りまく余裕などはない。もしそんな暇があればお相手捜しに専念しなさいと言う猫に対する戒めの句である。第二句、一年箱の中で過ごしたお雛様は数日間雛段に飾られそして又暗闇に戻っていく。お雛様にとつては一日中ただ座っている事こそが喜びなのである。紙に包まれて仕舞われるお雛様の眼は何となく哀愁を帯びている。

俳誌望見

梅澤輝翠

「俳句新空間」

No.22 二〇二六 麗春

発行人 筑紫磐井 佐藤りえ

取扱所 東京都杉並区井草

大井恒行が運営するブログ形式のウエーブ媒体同人ネットワーク、新しい俳句作品、時評、評論などを発信、ネットを中心とした前衛的、実験的な俳句の発表

作風は伝統的な定型、季語にとられない前衛俳句（新興俳句や現代俳句）の理論的探求や自由律、口語俳句などを発表している。

今回の参加者三十名の各二十句の中から一句

まだ遠き桜を揺らす夜汽車かな	花尻万博
口堅きこけしのあはれ五月間	花尻万博
失恋や五秒の瞬き夏終る	網野月を
重くとも負はねばならぬ秋子の忌	網野月を
恋猫騒ぎ太平洋のレアアース	加藤知子
冬ざれや息はしづかに風になる	各務麗至
石の声木の声秋は深まりぬ	神谷 波
猫じゃらし原発なんて慣れっこで	川崎果連
ゆふぐれに来る郵便や花八つ手	岸本尚毅

出囃子の少しずれたる日永かな	堺谷真人
茅花野に夫婦とならぬふたり居る	妹尾 健
まず鼻が生まれておりし喜見城	高橋修宏
この身また預りものの白牡丹	田中葉月
人とゐて我を失ふ十二月	辻村麻乃
昇天も奈落も能の目借時	豊里友行
ポインセチア許したふりをするふたり	なつはづき
虹長し高原駅を二駅過ぎ	中西夕紀
善人の振りするAI梅雨深し	中村猛虎
チューリップ傘を斜めにして出張	中嶋憲武
鯨たまに陸へと戻りたくないか	仲 寒蟬
海鳴りの幽かなる夜を大蛤	ふけとしこ
夜のふくろ飛べず飛ばずにゐる墓標	墨海 游
戦争は只事でありシャンデリア	堀本 吟
株売つて猫と避暑地へゆきにけり	松下カロ
秋草や津波の跡のジェラート屋	前北かおる
へうたんの村そののちの親不孝	村山恭子
熊穴に新宿地階ジャズ喫茶	もてきまり
永遠に娘ぢやないさ桃の花	佐藤りえ
秋深し方位は無灯そのままだに	川名つぎお
芭蕉などいるはずもなく捨紅葉	清水滋生

次号も是非ご紹介させて戴ければと思う気持です。

自選二十句

皆川更穂

ボサノバを刻むシンバル舞雲雀
春眠の誘ふ時空を超ゆる旅
やはらかな影よ雛にも吾子らにも
春愁や世の大事より家の些事
白衣着て理系の人となる五月
一滴の目薬の瞭天清和
菖蒲湯や柱の傷を付け加ふ
水槽の広さを生くる金魚かな
始まりは涼夜の臨時ニュースより

未使用の青春切符夏終る
後悔は筋肉痛や蝸牛
一日に一つ良きこと花木
長き夜を来世の我へ書く手紙
満月や決して見せぬ裏の貌
秋声や越後平野の土の色
秋日影スウィングジャズの匂ふ街
街といふ巨大なる巣や冬ざるる
背に守る晴着の寢息七五三
古里の容を纏ふ雪の花
六連星地球は不眠症のやう

語感とリズム感のハーモニー 無限と完性

網野月を

更穂氏の俳句の世界は複合物であつて、特定の世界に限定されていない。むしろ開かれた世界を積極的に築いていると言つて良いだろう。その意味では極めてロマン主義なのである。ロマン主義の芸術の目的の一つは自己完結であつて、その自己完結の目的の為に様々な方法を駆使するのである。様々な方法が表現の具体的な手法に還元されるときにロマン主義の作品群が複合物の様相を呈するのである。

そもそも俳句は詩であり、詩は文学であり、文学は芸術である。そして芸術の本質は二極化する。つまり無限をもとめるものと完性を求めるものである。その意味で氏の俳句の世界は前者の無限をもとめるものに分類されるだろうか。

次に自選句の中から幾つかの句を取り上げて鑑賞を試みたいと思う。

ボサノバを刻むシンバル 舞雲雀

この句で注目したいところは、上五中七の句意と座五の季語の取り合わせの句であるといふこと共に、その季語「舞雲雀」が叙景の句の雰囲気醸し出していることだ。叙景の空間は屋外の野原を想起させる。「舞雲雀」は「雲雀」の関連

季語なのであり、有数の歳時記には載録されている。それだけに座五に収まつていように見えろのだが、他の展開として「雲雀舞ふ」「舞ふ雲雀」の選択肢もあつたはずである。上五中七に動詞「刻む」が含まれているからこそ「舞雲雀」を選択したという理解も成立するが、その解釈は短絡的に過ぎるのである。もちろん季語「舞雲雀」に内包する質感というか、俳句的に言えば季語の本意・本情と上五中七の「ボサノバを刻むシンバル」のリズム感が共鳴していることに由来する取合せであることは間違いない。しかしながら「ボサノバ」と「舞雲雀」の時空間は完全に異なっている。交叉することさえない。しかしながら作者は、「舞雲雀」の視覚的把握とプラス僅かな聴覚的把握の中に「ボサノバ」つまり「新しい粹さ」を感じ取つたのである。この両者の赤い糸を作者は見つけたのである。作者だけが感得し得た赤い糸を読者は読み取るべきであろう。

春眠の誘ふ時空を超ゆる旅

上五の「……」は主格の呈示というよりは切れ字の作用を加味して示していると解釈した方が良いでしょう。極めて個人的な内容であつて、こうした個人的内容の句は氏の創作世界の一部を形成している。作品として成功している要因は、個人的な世界の叙述に終止することなく広く読者の共感を得ることが出来ているからである。

やはらかな影よ誰にも吾子らにも
未使用の青春切符夏終る
長き夜を来世の我へ書く手紙
背に守る晴着の寝息七五三

「春眠の」と共に以上の四句も個人的な事柄をテーマとしている。特に「春眠の」の句では単なる叙景にとどまらずに、詠もうとする空間の設定を一部放棄しながらも個人、事柄、そして作者から見る対世間のテーマに対して切り込む姿勢を有していると言つて良いだろう。このことが後述する無理な時間の設定をしないことへも繋がると考えられる。

水槽の広さを生くる金魚かな
始まりは涼夜の臨時ニュースより

以上の二句は一種の肯定的な意味でのアイロニーを感じる句である。一句目は人間を投影する譬喩を巧みに使用しながら、境遇を決して悲観することなく前向きに生きる姿を描出している。二句目は予知不可能な未来の偶発性を言い当てている。氏の信仰について筆者は知らないが、これは一神教には無い宗教的な環境が影響していると思う。

後悔は筋肉痛や蝸牛

決して昨日した久々の運動を「後悔」してのことではないのである。「後悔」というものは「筋肉痛」にも似た時間差でやってくるということである。座五の季語「蝸牛」は勿論取り合わせなのであるが、「蝸牛」には「後悔」も「筋肉痛」もないであろうと作者が人間と対峙して取合せたのだらうと鑑賞した。

満月や決して見せぬ裏の貌
秋日影スウィングジャズの匂ふ街
街といふ巨大なる巢や冬ざるる

また氏の多様な側面の一例として以上の三句が指摘できる。

所謂見立ての句である。それぞれ「満月」「秋日影」「冬」にある種のメタファの働きを期待しての作句である。
そしてまた多様な側面の一つに、郷愁の句もある。

秋声や越後平野の土の色
古里の容を纏ふ雪の花

作者のご出身は新潟県と聞き及んでいる。

六連星地球は不眠症のやう

「不眠症のやう」のなんではないのである。今となつては「不眠症」そのものである。現代社会への批判精神旺盛なこの句が時事にならないのは「不眠症のやう」の譬喩表現の妙が奏効しているからである。譬喩の効いた句はまた、真逆の解釈も可能にすることがある。作者はシンメトリカルAWDのファンなのかも知れないと筆者はふと思うからである。氏の創作世界は、無理な時間設定をしないで、季語に任せている風がある。そもそも季語は、現在一万語彙を遙かに超えている。そしてそれぞれの季語の時空間の設計はすべて異なっている。各季語の有する本質＝語感と句全体のリズム感の整合性が氏の句の本質なのであると筆者は断言する。今後の氏の創作の方向性や如何。丸く収めない句の世界に展開しても面白いのではないかと考えている。ロマン主義は複合物であると同時に、現実乖離した部分と共生しているのだが、故意に丸く収めた世界から食み出すことでロマン主義の次の世界を創造して欲しいと考えている。氏の次の世界が見たいのである。

自選二十句

穴戸洋子

春の雪昼ともつかず朝の膳
物の芽に柔らかき土寄せてあり
はくれんの百の蕾の天を指す
山吹の水面に写る隠り沼
亀の子の寝る子泳ぐ子神の池
薄暑光風着て走る下校の子
つくばひのしたたる隅に踊子草
羽衣の舞ひ立つやうな花菖蒲
本堂の開け放たれて夏めきぬ

鈴蘭を活けて一鈴こぼしけり
草いきれ相聞の碑を屈み読む
花カンナ昼の太陽ひとり占め
湿原の草は飴色赤とんぼ
よべの星今宵は見えず野分立つ
みちのくのこけしの首も秋の音
銀杏降るお地藏様は黄金色
靴音の訪れ来たる小夜時雨
山茶花の紅に戸惑ふ筈かな
冬至湯の香り豊かや夜の床
雲速く流るる朝や寒に入る

遅咲きの花は大輪

五明 昇

春、百花に先がけて咲く梅の花もいいが、秋霜を凌いで咲く菊の花にも格別の美しさがある。団塊の世代に属する作者が長年の修養を重ね、新珠賞受賞という大輪の花を咲かせた慶事に心から祝福のエールを送りたい。

作者は昭和二十二年（一九四七）、宮城県仙台市に生を受けた。生家は榴岡公園の近くにあり、青葉城、広瀬川、大崎八幡宮、野蒜海岸（松島市）など杜の都・仙台の空気を胸一杯に吸って、多感な少女時代を過ごしたという。母上が茶道（煎茶点前）の師匠をされており、受賞作のモチーフ「茶柱立つ」はここから想を得たものと推測される。

高校卒業後三年間のOL生活を経て二十一歳で結婚、ご主人の勤務先のある東京都へ転居した。その四年後に現住所のさいたま市見沼区風渡野に家を建てて転居、現在に至る。風渡野は自然が豊かで、近くに田園地帯も広がり、どこか故郷仙台に通じるものがあるという。作者はこのお気に入りの町を永住の地と定め、ご主人とともに二人の娘さんを育て上げた。しかし好事魔多し、数年前に病気で最愛のご主人を亡く

されたことが、俳句修養の道へと繋がってゆく。

俳句は四十歳位の時から藤沢市在住の叔母の手ほどきで勉強を始めていた。叔母は生来の文学好きで、俳句を送ると丁寧添削を加えて返送してくれるほか、しばしば吟行旅行にも誘ってくれた。こうした生活が十数年続いたとのことで、当時の叔母の薫陶が洋子俳句のベースとなっている。因みに受賞記念の『自選二十句』には、亡き叔母への感謝の気持ちをこめて、当時の俳句から抜粋して掲げた。

亀の子の寝る子泳ぐ子神の池
草いされ相聞の碑を屈み読む
羽衣の舞ひ立つやうな花菖蒲
みちのくのこけしの首も秋の音
冬至湯の香り豊かや夜の床

一句目、「神の池」は大宮・氷川神社の詠か、神の恩寵に守られて伸び伸びと遊ぶ亀の子が愛らしい。二句目は旅吟で、草いされにむせながら万葉の恋歌の碑を読む姿が目につかぶ。三句目、艶やかな花菖蒲を羽衣に見立てた視座の確かさを買う。四句目、みちのくのこけしの首の回る音にももの寂しい秋の気配が漂う。五句目、冬至の夜に柚湯の移り香を纏って床に就く至福の喜びがしみじみと伝わる。いずれも技巧に走らない素直な読み口で好感が持てる。

作者は令和五年（二〇二三）、夫亡きあとの淋しさを癒すためにかつて学んだ俳句の修養を思い立ち、さいたま新都心のコクーンシティ・カルチャースクール俳句教室の門を叩い

た。やがて教室の仲間に勧められて水明に入会、令和七年度からは同人に推挙されて現在に至っている。

函館のもののお揃り
巴里祭王妃の躍るオルゴール
秋の灯や猫には猫の影法師
新蕎麦を音なく啜る法事客
寒稽古弟子がうつちやる土俵際

カルチャースクール入会初期の作品を抽出した。一句目、函館のリラの花の雨に五稜郭の戦いに散った幕府軍将兵を重ねた愛惜の一句。二句目、巴里祭と王妃が踊るオルゴール人形の取り合わせが秀逸。三句目、秋灯に通常目の届かない猫の影法師を配置した妙が光る。四句目、蕎麦食いの稀有な側面を活写。五句目、寒稽古の緊迫感と熱気が見事に伝わってくる。いずれも新人とは思えない佳句で、若き日の研鑽が時を得て花開いたと言える。

受賞対象となった『茶柱立つ』は、住まいのある見沼区風渡野を中心に、日常目にする自然と暮らしをそのまま詠んだものだが、いずれも視座の高さと季語、楚辞の選択に優れた作品群である。

菜の花の真中に仰ぐ富士の嶺
健やかな目覚めに梅の香り立つ
どの枝も冬芽ゆたかに大銀杏
一句目、富士の雪嶺の白さと菜の花の黄のコントラストが

鮮やかで、色彩感覚溢れる作品。この句を先頭に置いたことで作者の立ち位置が明らかになった。二句目、健やかに目覚めた者には、万物が優しく語りかける。自然主義的な調和の中に生かされる喜びを平易に詠み上げている。三句目、植物は来春への冬芽を備えてから葉を落とす。豊かな冬芽に明日への希望に生きんとする作者の願望が込められている。

童心いまに語りかけつつ雛飾る
うす味を基調の夕餉衣被
搗きたての光る新米いただきぬ
笹鳴や朝の茶柱太く立つ

一句目、童心に帰ってお雛様とあれこれお話をしながら雛飾りをする作者の姿が目に見えるようだ。二句目、年齢が進むにつれて健康に留意し、料理は薄味を心がけるのが肝心だが、薄味と衣被のコラボが抜群。三句目、故郷・宮城は「ささにしき」の米どころ。搗きたての新米ほど美味しいものは無いが、「いただきぬ」の楚辞に心情がこもっている。四句目、作品の締めとなる一句で、見沼の自然に囲まれ俳句とともに生きる喜びが溢れている。

新珠賞へは、年とともに衰えてゆく気力・体力に喝を入れ、結果を恐れずに挑戦する心を蘇らせるために応募を決心したという。受賞の前後に思わぬ大病を患ったが、現在は自宅療養を続けつつ本復をはかっている。「今回の受賞を励みに精進を続け、今までの経験を活かしつつ、一步一步着実に歩んでゆきたい」と語る作者の目が輝いている。

山本鬼之介 選

水明集

老舗へと四葩を辿る小網町

朝靄にばかり浮島夏の草

網棚にリュックがずらり夏休み

夏草に路肩あいまい散歩道

夏の草もののけだつや闇にゆれ

血縁の薄き人にも母の日来

青嵐墓地を彷徨ふポリ袋

話し出しさうな遺影や鶴の夜

神職の茅の輪くぐるに笏立てて

灯明に浮かぶ本尊梅雨深し

吉川 杉浦千祐

さいたま 本橋稀香

生ひ茂る夏草分けて雲立てり
いつもの小道夏草茂り踏み迷ふ

夏嵐流線形の雲飛ばし

青嵐乱鴉の群れを鎮めゆく

五月闇遠く動くは列車の灯

神磯の鳥居を囁す青嵐

芒種の不動その形相にふと慈悲を

かつてこの地に駄菓子屋ありき梅雨曇

いささかの愁ひをおびて梅雨の蝶

神さぶる泉を掬ふ手の容かたち

忍城の石垣登る蔦若葉

白壁をこする梢や若葉風

葉の陰のゆかしき色や茄子の花

走り根は大地を掴み花は葉に

葉桜や木洩れ日の描く抽象画

卯波立ち孕む白帆の滑りゆく

夏めくや袖まくり行くビジネス街

朝掘の筍を待つ夕

はちきんの飲みつぷりよし初鯉

夏めくや少年の背の伸びる季

利根 倉田星歩

平塚 丸屋詠子

さいたま 反町 修

寺町知子

新米のサーフボードに卯波立つ
あやめ咲きかつて恋路に起請文
老夫婦ゐて芍薬白く映ゆるとき
桐の花紫だちて空へ空へと
足場組む人みな異人日の盛り

越谷 阿部幸代

夏めくや黄昏時の立ち話
夏めくや櫂の葉陰広くなり
旅の宵京筍のおばんざい
父の日や久に父の名書いてみる
父の日や受け継ぎし辞書古色帯ぶ

さいたま 内田章子

里山の別れ道なる桐の花
地下足袋の棟梁上る五月晴

さいたま 飯田忠男

夏めくや泥振り払ふスニーカー

平野 楽

四つん這い時間を止めるあめんぼう
さみだれや電飾かすむ逢魔が時
サイレンを妻より先に墜栗花雨

江戸つ子の立ち居振る舞ひ初鯉
一生を日日振り返り花は葉に
明易や朝刊直に受け取れり
大阪城今は陣無く夏めけり

武蔵野に陵しづか滴れり

田中弘子

一ノ倉道にいしづみ青葉驪

森下山菜

奔り来る棚田の風を鯉のぼり
レジ横に十五cmの鯉のぼり
菖蒲風呂四の段飛ばす九九の声
ざしざしと畳み香の立つ菖蒲風呂

かはほりに今朝の眩しき逆さ富士
滴りやいづれ世に出て大河なす
米五升炊いて見送る宵祭
熟れ順を守らず降りぬ柔いちご

また空の狭くなる街青嵐

上尾 室井早都子

夏立つや杖つき急ぐ従兄会

川島夕峰

サバンナを知らぬ獅子の子青嵐
補助輪を泣く泣く戻すこどもの日
こどもの日池いつばいに鯉の餌
たかななや家系図に見る子沢山

雑草の勢ひ止まぬ立夏かな
先生と呼ばれ乾杯生ビール
一日ひとつ小さき畑の苺かな
倒るるな風が青麦強くせり

暁光をし吹く卯波や大鳥居
掛け声の罫の滾る天下祭
花桐や昭和を刻む掛時計
出稿の期限失念竹夫人
赤ゑんどう足して餡蜜定まれり

さいたま 皆川更穂

部屋中を服道楽の更衣
粹筋の隙は見せまじ単帯
一瞥をくれてひらひら熱帯魚
菖蒲田に川風土手を越えて来し
堪へきれず雨粒落とす額の花

大阪 遠藤人美

校庭に無数の余韻夏休み
立ち漕ぎで上る坂道五月富士
盤石な守備網崩す大夕立
網元の腕の見せ場や初鯉
蛭雪の頃遥かなり雲の峰

元田 亮一

スタジアムに子等の力走風薫る
新緑の真つ只中を疾走す
新緑やロングジャンプの砂を掃き
新緑や山はむくむく膨らみて
夏に入る厨に満つる酢の匂

若狭 山崎郁子

道草は母待つ時間麦の秋
水芭蕉仏蛇の放つ黄と白と
郭公の声に生まるる湖の波紋
船遊パリの灯滲むセーヌ川
スナツクに吸ひ込まれゆく守宮かな

綿引まりこ

船遊世過ぎの垢を流しけり
駆引きはひねもす快のちぬ釣ぞ
岐路立ちて決むるは人ぞ著我の花
辺境の峽に浄土か水芭蕉
寺裏に早乙女一人肅肅と

さいたま 秋谷風舎

夏めくや夫婦似てゐる町中華
初めてのバイト帰りや星涼し
五月雨や誰も気付かぬ非常口
意を決めて水面離るる夕螢
ふたつ啼く夜鷹辺りを掠めたり

石関 六弦

書き終へて梅雨の降る音聞こえけり
金糸梅リスバダールの処方箋
涼しさや言葉の嵐止む頭
紫陽花や何も起こらぬ頭の日
虫の音の微かなやうな涼しさよ

吉川 拓真

子が戻り家族総出の大田植

さいたま 羽島秀子

炎帝が水の地球を炙りゐる

炎天を来て炎天の天守跡

寅さんの四角き顔や夏の空

原子炉の処理水いまだ梅雨入穴

朝の陽に真白き海芋また一つ

雨上がり客待つ庭の七変化

軒下で蛇も密かに更衣

夕焼け空復見せて行く定期便

龍安寺砂紋涼しき十五石

独り身の酒の膳立て朧月

散り残る花の転生美しき

雛飾る役場の目立つ老いし村

間欠泉噴き出す度に山笑ふ

山村に住みたき心境風薫る

待ちわびし雨が太らす実梅かな

梅もぎの目に染む雨の目葉よ

木洩れ日に撓に実る梅の影

一年の総決算ぞ実梅もぐ

梅雨晴や湖にくつきり梅丈岳

若狭 松村笑風

香田裕誌

三浦玲子

紫陽花や傘さす女の青ネイル
紫陽花や石段登り朱の鳥居

若狭 畠中風花

紫陽花や誕生石のパール買ふ
鈴生りの紅点す実梅湖畔かな
列をなす軽トラ実梅集荷場

三郷 戒能邦人

新緑の濃淡に射す光りかな
母の日や出不精なれど家守る
朝シャンの少女駆け出す青嵐
夏場所や玄人好み技もどる
夏場所や若隆景に古武士みる

川口 木村小麦

船頭の歌のうまさよ船遊
岩肌を真近に眺め船遊
蚕豆は赤児の足裏愛らしき
ごみ漁る鴉愛せと愛鳥日
白服が気障には見えぬ男ぶり

新井のり子

形かへ雲流れ行く愛鳥日
気分屋の義姉にお世辞の夏はじめ
バードデー空に響くは吾子の声
すかすかの空豆ばかり引当てり
街の灯に焼き空豆の旨きかな

読み返す沙翁の戯曲夏至の夜

夏至といふ言はば地球のけぢめの日

風鈴屋風は指揮者と演奏者

実梅拭く慈しむごと一つづつ

暑中見舞「元氣」とあつた妹の逝く

さいたま 駒谷行雄

戸袋にすずめの巣づくり明易し

明易き場外市場築地なり

良いところで夢の打ち止め明易し

僕の夢は仮面ライダー柏餅

逆上がり得意顔なり柏餅

門 真宏治

高原の無人販売光る茄子

更衣傷みし行季捨て難し

時の日や吾子の病を受け入れり

高波や無人駅舎の大夕焼

雲の峰三角ベースとランドセル

播磨 進

とんがりをそつと確かめ笹粽

胸高に帯を締め上げ笹粽

凝視する猫のひげ先若葉風

デイケアのバスは静かに若葉風

切りたての前髪に手を若葉風

東京 山中いちい

夫居ずに三十年の宵蛩

宵蛩窓に安堵の火を残し

紫陽花や家に寄り添ひ半世紀

坪畑の育ち誇りに茄子の杭

父母の回忌静かに花菖蒲

若狭 西川夕月

新じやがのポテトサラダを食卓に

梅漬けて部屋いつぱいの香りかな

梅酒なる若狭の宿の食前酒

夏草や大戦語る人逝きて

小さき手に小さき命の蛩かな

森下 風湖

鳥の日や背筋伸ばして歩く人

樹の揺れて巢のあるを知るバードデイ

博物館ゆるりと巡る愛鳥日

莢のまま蚕豆焼きて馳走する

勇氣出し夫を褒めるやサイダー飲む

川口 加藤みち

代田に手合はせ豊作祈りけり

夏の少閑子に誘はれて台北へ

水湛へ宅地の中の代田かな

郭公に導かれたる墓さがし

サイズびつたり左ボタンの夏の服

さいたま 小川 洋子

薄暑光ビルにピエロの如き影
夕薄暑光の四角風の丸

往くものを眺むるばかり水芭蕉
いとしくてわづらはしくて水芭蕉
一斉に震へて歌ふ玉簾

金沢 小島つぶ金

傘を差し坂を下れば麦の秋
走り来る母のお迎へ麦の秋
老漁師舳先で探す青葉潮
青潮の神のひと搔き大蛇行
あぢさゐを巡る谷中の馴染むころ

さいたま 北山建治郎

春蟬や海食洞の上の松

鳥交る天の岩戸へ朝日さす

農鳥の宙へ羽ばたく五月富士

父と子の絵本コーナーこどもの日

こどもの日肩車行く遊歩道

さいたま 石黒由美子

五月富士水草青き柿田川
老鶯の声に鎮もる山上湖
白樺のすくと伸びゆく立夏かな
薫風や水玉リボントランクに
百本のカーネーションを母在れば

大神満智子

ぶんぶんと盛る羽音よ盛る藤
気負ひ立ち漁師繰り出す青葉潮

青葉潮魚群の中へひと潜り

紫の牙ゆる酢漬けの藤の花

主無き家の藤棚満開に

北出久美子

花摘みて友とはしやぐ日薄暑光
褪せつつの母の心に新茶の香
久々に包丁研ぎて初鰹
新緑の吐き出す息吹ソーリング
境内で新緑見上げ空狭し

高山みどり

母の日の不意の花束白き雲

夏めくや木木の葉に葉に日ははねて

お花畑ひとすぢの風屋根を行く

麦の秋ペダルこぎゆく一本道

麻服着てショーウィンドーめぐる午後

三森恵子

一八や築百年の庭を占む
登校の見守り隊も更衣
園庭よりプール遊びの賑賑し
楚楚と咲く著我を手折りて押し花に
今年また会ひに来たのか姫蛭

和歌山 嶋田洋子

新緑や検診終へて帰る路

旧友の安否も届く新茶かな

練り切りに黒文字二本新茶汲む

参詣の高知の宿の初鰹

高台の上野大仏夕立かな

蚕豆パイふくらむ香り家じゅうに

夕立が来る気配して見る車窓

こどもの日勝負本気のゲームかな

愛鳥日鳩に譲りて遠回り

愛鳥日鳥に餌やり去る人よ

水無月や夕日水田に滑り込む

水無月の里の稜線ただ優し

水無月の菜園の蔓迷走中

いつの間に夫も日傘の影貰ふ

見晴らしの岡へと続く白日傘

泥まみれ歓声あがる田植かな

風薫るプレイリストの歌謡曲

診察の番号を呼ぶ若楓

訳ありの紫陽花の鉢赤ばかり

紫陽花や車窓に迫る飛鳥山

さいたま 阿部貞代

川口 澤田たみい

さいたま 緒方みき子

樋口 元美

大坂 飯塚智恵子

さいたま 篠原さよ子

田口 文子

石井 直子

雨粒すぎる洗濯挟み梅雨晴間

雨の日は君に会ひたき蝸牛

野良猫の水桶ひらり夏の華

黒髪が風が昭和へ花石榴

ほろ酔ひて鮎跳ねる膳化粧塩

空拭きの腕にさしむや梅雨の廊

コンサート今夏空へ熱唱す

夜風なか異国語弾み船遊

水芭蕉まだ見ぬ沼の便りかな

呼びすての青春の日や船遊

陽炎やラリーの続くテニス場

キャベツ半切迷路の如き渦巻いて

高原の空の果てまでキャベツかな

武者人形園児の声が雲にのる

体ごと手を振る孫や大夕焼

一筋に水脈曳く鳥や明易し

明易やキャリーケースの音高く

明易や猫の重さの柔かし

波音の届く露天湯明易し

あこがれはユーチューバーや柏餅

蕎麦の花空と大地はひとつなる

若人の夢を注ぎ足す新走り

陽に翳すシャインマスカット小惑星

大小の葉つばの皿の赤のまま

アルプスで少女は育つ秋麗

所 沢 関根千恵

初鯉海の男や力瘤

初鯉空壇並べ熱き談

夏めくや喉震はせて詩唸る

夏めくや世界に一つの服作る

夏めくや作句に挑戦走れペン

さいたま 榎本道代

退院日ひとしほ旨し柏餅

柏餅兄の遺影に笑みもらふ

明易や能登の再生金で継ぐ

明易や朝一番の鳥の声

念押され決心ゆるる卯月曇

西窪弘子

姦しき女三代柏餅

新聞で作る兜や柏餅

明易し枕に淡きレール音

短夜の夫の寢息や旅の宿

夏の空代打の放つ決勝打

三浦真由美

さいたま 今西 操

頬張りて葉脈の付きし柏餅

柏餅句作に悩む傘寿かな

配達のバイクのうねり明け易し

友と旅枕離すや明け易し

決めかねし時の流れや明け易し

リモコンのオンに始まる夏に入る

大梅雨や牙を剥きたる雲の列

房州路昼餉の皿に叩き鱈

大ホール天使の声や響きあふ

鈴木藻好

雲海に浮ぶ面影初夏の風

走り梅雨新聞端から読み切りぬ

走り梅雨峠の茶屋のけぶりをり

梅雨入りや猫恨めしく空睨む

梅雨寒や仕舞ひ忘れのちゃんちゃんこ

行く宛のなき一日や梅雨籠

菅原靖子

聳え立つ氷川の杜の樟若葉

公園の子らの歓声樟若葉

夕暮の草笛悲し見沼行く

草笛は郷愁の風呼び起こす

昼御膳鱈の天ぶらまん中に

絵日傘の陰を分け合ふ双子かな

所 沢 飯室夏江

横 浜 石井妙子

空魚籠を時折覗く白日傘

湾曲に並み立つ日傘黒部ダム

水無月や轍に杖の跡のあり

風待月百歳で逝く大和尚

新緑の木立が囲む県庁舎

染め抜きを着こなす力士五月場所

草笛や向う岸より友が呼ぶ

手を繋ぎ囲む大樹の樟若葉

学舎の歴史の証樟若葉

さいたま 武田重子

鬼 石 榊原聰子

炎帝に弄ばるる大八洲

炎帝の遅刻早退大歓迎

畔のままゆるく弧描く田植かな

早乙女の白き脚半の田に映ゆる

筑波嶺の影乱しつつ田植かな

横 山 礼子

さいたま 山下ユリ子

手加減の兄弟げんか柏餅

家系図に横線足しぬ柏餅

明易し夜泣きの稚の寝息かな

明易し温泉宿の長廊下

風薫るご朱印受くる異国人

木 谷 葉子

大 阪 海老名ノルン

一本のほつたらかしの夏みかん
六月や丘も戦地も薄緑
緑陰や眠りのツボを話す人
砂糖水うれしきお八つだつた頃
春愁のどうといふことなき小雨

麦秋の畑にビニールハウス建ち
ゼラニウム差し芽の鉢の増えてゐし
看護師に髪ほめらるる短夜かな
補聴器の耳にとどくや時鳥
時鳥の声を聴きつつ夫散歩

名越の祓姉の手を引く弟
峠越え蕎麦香り立つ旧街道
御手前に揃ふ白足袋夏座敷
水中花姉は認知症となり
白玉や峠の茶屋に薄日さす

晴天の女神の如き夏木立
梅雨寒や病院予約スマホにて
梅雨寒や待合室の椅子足らず
老婦人夏手袋の爽やかさ
鮎食ふや田舎の谷川思ひ出し

朱羽舞ふ早乙女となる水滴ちて

さいたま 稲野 幸子

腰伸ばしタワ―見上ぐる初田植

炎帝に暫しの憩ひ願ひたり

流線形を待つ肩車子供の日

小満やピアノ余韻に乗るアリア

準備よし友の青梅待つばかり

鯉買ふ今日は安売り水曜日

迎へ梅雨とぎれとぎれの雨足や

園児らの並ぶ長ぐつ梅雨に入る

梅雨晴間大にぎはひのドッグラン

踊るかにどんと桴打つ夏祭

「狂詩曲」鍵盤揺るる青嵐

見送りてばかりと広し初夏の空

走馬燈柱時計のほんと打つ

ス―脱ぎ野良着の夫や茄子の花

菩提寺の古井戸の跡夏兆す

吾が生家の厨辺の井戸垣のぼら

蟻一匹走るポーチの煉瓦目地

青梅雨や市民人物デッサン展

青水無月青き尾羽の鳥飛翔

宮代 関谷多美子

さいたま 伊藤美津子

東京 清水美千子

緑さす蛇笏の住みし山蘆へと

伸び行くや緑の美しき今年竹

偽りの無き香の立ちて青山椒

「特急かいじ」の車窓にうつる雪解富士

風青し俳諧堂の壁白し

大泣きの子の左手の柏餅

愛犬の思ひ出の道にはたづみ

風薫る自転車悩み解決す

明易し珈琲時間の早まりて

芍薬の香に誘はれて目眩かな

夏の夜に友星になる夢舞台

その夢が友と語りて虹となる

彫り物が三社祭の華となる

母の日や電話にうかぶ母の顔

見るたびに背伸びするかに若葉かな

青嵐三角屋根の風見鶏

梅雨の穴外人墓地の赤き薔薇

雨の夜は筍飯の押し寿司に

蝸牛残した後のスラローム

更衣坂の汗にも潮の香よ

草加 持永喜夫

東京 桐山遊童

関 久美子

さいたま 小野町子

万緑や細く険しい登山道
ウグイスのさえずり完壁昼の駅
風薫る八角蓮の葉つややかに
新緑や幼き児等の髪光る

まいまい座す言いたいことは明日言う
ノリタケの白い器に白薔薇を
梅酒漬く十年先を楽しみに

藤沢 小島喜代子

東京 中村まどか

☆

☆

特集 初心者の気になる俳句表現 特集 俳句の杜二〇二六 精選アンソロジー作家作品集	巻頭作品10句	高崎公久・菅野孝夫・向田貴子 川嶋一美・小澤 實・佐怒賀正美 清水和代・大高 翔	俳壇 9月号 8月14日発売 定価1000円(税込) 巻頭エッセイ 恩田侑布子 八木健道 滑稽俳壇	四季巡詠33句「第Ⅴ期」……川井城子・佐怒賀直美 リレー連載 没後50年の俳人たち(後藤夜半)……西村麒麟	新連載 「名句DE動画」の世界……蜂谷一人 風の旋律……対中いずみ セピア写真館……中尾公彦 編集室の風景……雛俳句会 いま、気になる俳句の言葉……井上泰至 地域結社の巨人たち……渡部有紀子 季語を考える……仁平 勝 二度目の俳句入門……長谷川 權 今月の句……対岸俳句会	連載	俳句と随想12か月 波戸岡 旭・吉田千嘉子
--	----------------	---	---	--	---	-----------	------------------------------

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

水明競詠

(令和八年)

恒例の季音・水明全員が対象の水明競詠です。ふるってご投句下さい。
掲載は十二月号になります。

兼 題 「秋 晴」 「秋の晴」 「秋晴る」の傍題に限る

「法師蟬」 「寒蟬」 「つくつくし」 「つくつくぼうし」の傍題に限る

「手」 (詠み込み) ※秋の季語で詠む

句 数 三題通じて五句
締 切 九月十五日(締め切り日を厳守ください)
投句用紙 九月号巻末に添付

※十二月号の水明集はありません

作品鑑賞

山本鬼之介

老舗へと四葩を辿る小網町 杉浦千祐

本句の「小網町」は、東京都中央区にある「日本橋小網町」のことであろう。筆者は、小学四年から中学三年まで、同じ中央区の兜町二丁目に住住していたので、茅場町や蛸殻町、人形町など周辺の町を含めて、日本橋小網町も日頃の行動範囲であったから、町名を聞いただけで昔の想い出に浸ることができた。とは言え、当時は子供であったから、日本橋小網町にある老舗がどういう店なのかは特定できなかった。調べてみた結果、明治七年の創業で、昭和二年に建てられた木造の建物が残っている「うなぎ喜代川」に行き着いた。

作者は今年六月、紫陽花の盛りの頃にスマホの地図を見ながらこの老舗店に到り、伝統の鰻を堪能したのではないかと想像する。「四葩を辿る」という表現が実に詩的で、老舗への思いが籠められている。

話し出しさうな遺影や鵜の夜 本橋稀香

作者の文机に置かれている亡き夫君の遺影であろうか。毎

日一度はその日の出来事や嬉しかったことなどを語りかけているのであるが、その日の夜は何故か夫の方から語りかけてくるような気がした。外ではあまり聞いたことのない鳥が鳴いている。以前誰かに教えてもらった別名鵜とも呼ばれている虎鵜^{とらう}ではないか。何となく不気味な鳴き声であるが、夫が何時も側に居てくれるので心丈夫である。

夏嵐 流線形の雲飛ばし 倉田星歩

流線形の飛行機や機関車、そして自動車などは、子供の頃の憧れの的であった。旧国鉄の時代から現在のJ・Rの技術を結集した新幹線の流線形の極致とも言える車体美は、子供時代の想像を遙かに超越するものである。それ等の人工物に対して、掲句の流線形は大空を流れて行く雲である。力強い夏の嵐が作り上げる自然美と言えよう。

神さぶる泉を掬ふ手の容^{かたち} 丸屋詠子

神山に湧き出ている泉である。透明度は抜群で、真夏でも冷たい水がこんこんと湧き出している。泉に直に口を付けるなどとはもってのほかで、先ず両の掌を淨めてから小指を揃え、神水を掬う容をつくるのである。思わず二杯そして三杯と、寿命が延びる思いのする泉である。

走り根は大地を掴み花は葉に

反町 修

「走り根」についてその意味と成因を調べてみたが、この言葉は主に盆栽用語として使われているようで、「土中や鉢の中で他の根よりも極端に長く太く、勢いよく伸びた根のこと」と説明されている。我々俳人が、山中や沼湖の畔、公園などの場所で見える走り根のイメージは、土中から躍り出て大地をのたうつ大蛇のような姿である。

この俳句の走り根は、桜の古木の根であろう。樹齢を重ねてはいるが、毎年見事な花を咲かせ、大衆を喜ばす頼もしい走り根である。

はちきんの飲みつぷりよし初鯉

寺町 知子

「はちきん」八金」とは、広辞苑によれば、高知県（土佐）において、向う見ずで勝気な女性のことを言う、と説明されているが、ネット検索では、男勝りで気性の激しい女性や、快活で行動力のある高知県（土佐）の女性を表す土佐弁、と説明されている。双方を総合すれば、より鮮明な「八金像」が浮かび上がってくるだろう。また、ネット検索では、その語源の謂れも出てくるので面白い。土佐の方言であるから、当然のこと、江戸時代から受け継がれてきた言葉だと思われ、彼の坂本龍馬でさえ、当時の八金女性に遣り込められていたのではないかと想像する。

さて、この句の作者が、「はちきん」の言葉を識った過程や、実際にそのような性格のひとに接したことがあるのか、大いに興味を湧く。因みに、筆者がこの人物こそ八金と思っている水明人は、故人のM・Tさんと現在活躍中の会員のお一人である。ああ八金よ永久なれや。

桐の花紫だちて空へ空へと

阿部 幸代

「枕草子」の第一段「四季の趣」の冒頭の一節「紫だちたる」が直ぐ浮かんでくる俳句で、あの優雅な桐の花を讃えるのに相応しい言葉であると思う。地に落ちた桐の花は寂しいが、空を目指す桐の花には限りない未来があり、希望と勇気をもたらえる気持になる。

里山の別れ道なる桐の花

飯田 忠男

原作者の俳句とは違った味わいを感じさせてくれる桐の花である。子供の頃、好きな女の子と手をつないで歩いた里山の道。別れ道まで来て、二人は家路へと別の道を行く。淋し気な二人を、桐の花が、「また明日があるじゃないか、元気出せよ」と見送っている。作者も筆者も、そのような少年の一人なのである。

奔り来る棚田の風を鯉のぼり

田中 弘子

年月に育まれた棚田のある美景の中を、太い轆竿の上で、

悠々と泳ぐ鯉幟。近年では、なかなか見ることのない貴重な光景である。幟の鯉を泳がせているのは、棚田を越えてきた風であるから、棚田の向こうには海が広がっているように思える。上五の臨場感の溢れた活動的な言葉が、鯉幟に命を与えたのである。筆者が幼少の頃、庭に幟竿が立ててあり、五月の節句には木綿の鯉幟が泳いでいた。強い風が命であった。

また空の狭くなる街 青嵐 室井早都子

東京・中央通りの室町三丁目から京橋まで、道路の両側に、見上げても空が見えないような超高層ビルが建ち並んでいる。室町方面から再開発が進み、ついに京橋までつづいた。筆者は、月に三度この中央通りのこの地区に出掛けるので、掲句に接して作者の嘆きをしっかりと共有した。皇居の森からやってきた青嵐が、ビルの超高層部を吹っ飛ばして青空を返してくれないかと願う俳句である。

父の日や久に父の名書いてみる 内田章子

「母の日」はともかく、残念ながら「父の日」に対する実子の反応は薄いように感じる。本句もそういう感覚をさりとて表したものと受け止めた。

作者は、今年の父の日にくと生前の父のことが頭をよぎり、手近にあった紙に父の名前を書いたのである。ただそれだけのことであったが、満ち足りた気持ちになったのかと思う。それで充分である。

江戸っ子の立ち居振る舞ひ 初鯉 平野 楽

「初鯉」と言えば、山口素堂の「目には青葉……」の有名な俳句や、「襦袢質に置いても……」の諺が口に出るが、江戸っ子に直結するのは後者であり、襦袢を女房に置き換えた危うい諺もある。とにかく新し物好きの江戸っ子が珍重したので初鯉である。物流の発達した現代とは全く違う環境下で、江戸の庶民が先を争って高値の初鯉を手に入れたのであろう。筆者もこれまでに、純粋な江戸っ子と称される数人の人物との面識があったが、とにかく話のテンポが速く、とても気持いいのだが忙しなかった。やはり現代の江戸っ子も初鯉を珍重するのであろうか。

滴りやいづれ世に出て大河なす 森下山菜

山の斜面の地肌から滲み出る滴りである。ごく僅かな水が集まり細い流れとなり、流れが集まって川となる。さらに川が合流して大河を形成する。山で滴りを見た作者の大自然への畏敬の念であるが、大器晩成の人への思いにも通じる。

一日ひとつ小さき畑の苺かな 川島夕峰

家庭菜園の極々小規模の畑に苺を育て、日々愉しんでいる。一度に五粒ほどは食べたいが、ぐつと我慢して一日一粒のペースを守っている。さて、そもそも幾粒生った苺なのか、ま

たは、日々成熟度がずれてゆくので一日に一粒なのかなど、読み手としてはなかなか気のもめる俳句ではあるが、素人栽培ならではの愉しい雰囲気が伝わってくる。

赤ゑんどう足して餡蜜定まれり 皆川更穂

餡蜜は蜜豆に餡を載せたものと説明されているが、蜜豆を構成する具として欠かせないのが寒天と茹でた豌豆である。

さて、その豌豆については、各種の国語辞典や歳時記によって表現が異なるが、筆者の見解では、手近な国語辞典として広辞苑と明鏡国語辞典に明記されている赤豌豆が本命だと思う。まさに本句の内容そのものであり、赤豌豆が欠けていては蜜豆にはならないし、餡が載っていたとしても餡蜜にはならないというたいへん説得力のある俳句である。

因みに餡蜜は、そのむかし銀座五丁目に二階建ての和風店舗を構えていた甘味処の老舗「銀座若松」が元祖とのこと。昭和33年に若松の二階座敷で、長谷川かな女の指導句会として水明・若松句会が発足し、今は、京橋区民館を会場に、若松例会の名で毎月第一土曜日に開催している。

立ち漕ぎで上る坂道五月富士 元田亮一

若さをアピールするような自転車立ち漕ぎである。多段変速ギヤーの付いている自転車ならギヤーチェンジで楽に上

れる坂道でも、単歯の自転車だと儘ならず、立ち漕ぎに頼るしかない。懸命に立ち漕ぎして坂を上りきると、眼前に雄大な五月富士が迫ってきて疲れが吹き飛んでしまった。

スナックに吸ひこまれゆく守宮かな 綿引まりこ

一読して不可解な俳句であるが、何故か惹かれる俳句でもある。夜のスナックの窓に張り付いていた守宮が、ちよつと目を離れた隙に見えなくなった、という意味なのだろうか。店に潜入した守宮が客に変身して水割りやビールを飲んでいる姿を想像すると、夏の夜が一層楽しくなる。守宮のようなイメージの人がスナックに入ったという解釈も成立つだろう。

夏めくや夫婦似てゐる町中華 石関六弦

広い世間には、顔付きや話し方、思考回路などが似ている夫婦が居る。作者の住む町の中華店の夫婦も似たところがあるのだろう。時々口喧嘩をしているが気が合っていて客の受けが良く、料理が美味くて店も繁盛している。

粋筋の隙は見せまじ単帯 遠藤人美

或る日街で、一目で粋筋と察する和服の女性に出会った。頭のでっぺんから爪先までまったく隙が無く、綴れ織の単帯が異彩を放っていた。多分名の知れた芸妓であろう。

水琴窟

(水明集七月号鑑賞)

池田雅夫

短調の織りなす調べ春眠し

西川夕月

暗く寂しい感じをかもす「短調」。その調べに身をまかせている。ある人は「春眠」をモーツァルトの音楽を聴いているような快適なひとときであると言っている。感性が重視される春眠であるから音楽的な表現は的を射ている。朝・昼・晩の時を選ばず催す眠気を充分に堪能しているのである。

大空に行路のありや鳥帰る

木村小麦

冬の間、日本で過した渡り鳥が春になって北方の繁殖地へ帰ってゆく。群れをなして空高く飛んでゆく。鳥は体内に方位磁石を持っていると言われるが、迷うことなく帰ってゆく、その不思議を「行路のありや」と問いかけているのだ。自由に渡来し、帰ってゆく鳥を羨み、感傷を重ねている。

春泥を飛び越す白きスニーカー

石黒由美子

雨や雪解などで道がぬかるみ状態になることが多い。特に春を迎えた喜びと土の感触の愛着が「春泥」として季語となっている。「白きスニーカー」であることから学童であろう。新学期に新調したスニーカーを汚すまいと「飛び越す」。

奥入瀬の水やはらぎてかとの紐

山下ユリ子

青森県の「奥入瀬」溪流は観光の名勝であることは周知の事実。厳しい冬を堪え、ようやく春を迎えたのだ。「水やはらぎて」に春の悦びが感じられる。そして、「かとの紐」と締め括っている。産卵を了えたばかりの蝌蚪の紐に生命の神秘と尊さ、自然の雄大さを感じられずにはいられない。

名残り雪孫の手の平真つ赤か

澤田たみい

春になってから降る雪で、冬の名残りとして最後に降る雪を「雪の果」といい、それを詠嘆して「名残の雪」という。卒然の雪に、珍らしがって外へ遊びに出た「孫」。雪玉をつくり、雪だるまをつくったりと、思う存分に遊んでいる。その手は「真つ赤か」になっていた。その情景が浮かぶ。

愛犬のかほそき声や朧月

関久美子

犬やおおかみが遠吠をする。満月の夜には声を一層高く長く伸ばす。「愛犬」も然り、例外ではない。だが今宵はほんやりと浮かぶ「朧月」。すぐれない気分は愛犬も同じであろう。「かほそき声や」が人間の心情を代弁しているようだ。

兎に譲る降車ボタンや春うらら

樋口元美

路線バスで出かけたのであろう。「降車ボタン」を押そうとしていると、乗り合わせた兎も降りるようで、ボタンを押したがっている。そこで譲ったのだ。ほのぼのとした光景に「春うらら」を的確に取り合わせている。

廃線路朧月夜の旅路かな

西窪弘子

各新幹線の開業などで在来線が廃線になったところも少なくない。廃線になった観光地に久々に訪ずれたのであろう。往時を懐かしみ思い出している。若かりしころの楽しかった思い出を「朧月夜」に重ね、哀愁にひたる旅をしている。

貨車すべて油槽車山夕焼

森田克己

武蔵野線では時折、コンテナ貨車に出くわす。車両のすべてが〇〇石油と書いてあることもある。「貨車すべて油槽車」には昨今のタンカーの事情を危惧しているように思う。字数を工夫して「貨車一便すべて油槽車」にしてはいかがか。

薔の矢一斉射撃紫木蓮

飯塚智恵子

木蓮の薔は一斉に天を向き、あたかも槍か弓の矢のごとくに並び立つ。「薔の矢一斉射撃」とは、実際に観察したのであろう。強烈な表現の、その臨場感に圧倒された。

姉いもと母の手縫ひの春の服

関谷多美子

とくに女性は、春の陽気にさそわれて着るものも明るく華やかなものになる。幼い子であっても好みの色があり、姉妹それぞれに合わせて「手縫ひの」服を作った母。華やかな色柄の「春の服」を着た「姉いもと」の笑顔が見えるようだ。

白内障オペ後に見ゆる桜かな

柿原聰子

最近の「白内障」の手術は以前と比べると著しく進歩し、体への負担が軽減している。白内障の手術をしたほとんどの人は、明るくなった、よく見えるという。はつきりと見える桜の美しさを「オペ後に見ゆる桜かな」と詠嘆しているのだ。

寄居虫がテント担いで気まま旅

桐山遊童

巻貝の殻にすむ「寄居虫」。殻を背負うように動く。まるで「テント」を「担いで」いるように見える。少し動いては止まる。その様子が「気まま旅」に思えたのだ。ユーモラスな発想がいい。「テント」は夏の季語であると参考までに。

灰色の空切り裂きて初燕

森田恵美子

なんとなく白くかすんでいる春の空。のどかではあるが、ときにどんよりとした雲が現れる。その「灰色の空」を「切り裂く」ように「初燕」が翻りながら飛んでいったのだ。

網野月を選

山紫集

卓上の紫陽花の背を見る昼餉

曲淵徹雄

紫陽花の青の世界に踏み込めず

飛永 鼓

紫陽花や青き地球は青きまま

横山 礼子

紫陽花は嫌ひ母の忌は大雨

新 暦文

紫陽花の隙間隙間の雨激し

篠原さよ子

庭中に紫陽花挿して夫逝けり

梅澤輝翠

刺繡花陽に褪せてゆく絹布かな

紫陽花の太鼓腹めく通学路

電器屋の裏にぼつと白四葩

あぢさゐや三日にあげず引く神籤

まん丸に見え紫陽花の歪なり

界限に寡婦また一人濃紫陽花

紫陽花の小路にぼつり笠地藏

紫陽花や児童の胸にGPS

長谷の寺雨にあぢさゐ濡れて咲く

紫陽花が戸口を守る空家かな

主なく彩を忘れた七変化

小林京子

石田慶子

樋口元美

遠藤人美

——以上特選

石川理恵

本橋稀香

川島夕峰

木谷葉子

北山建治郎

倉田星歩

河野はるみ

剪定のミスか我家の四葩花

榊原聰子

紫陽花の青映ゆ雨後の夕茜

関谷多美子

紫陽花や七彩競ふ遊歩道

笹本啓子

糠雨にけぶる山門七変化

染谷風子

紫陽花や寺に消え行く搦みもの

渋谷きいち

紫陽花や垣越しを行く傘の花

反町 修

看取り終へはつと涙の七変化

嶋田洋子

狭庭にて独り芝居や七変化

高橋満耶子

雨の日の紫陽花にある不整脈

清水桂子

行く街の見事なもてなし七変化

武田重子

あぢさゐや祠に酒の供へ物

下川光子

紫陽花の絵手紙届く懐かしさ

田中章嘉

濃紫陽花生きとし生ける雨匂ふ

霜多光代

濃紫陽花よく風通る緩和棟

田中弘子

紫陽花の雨にうつむく無縁寺

菅原卓郎

あぢさゐの花ことば男ごころかも

寺内洋子

手水舎に四葩華やぐ古刹かな

菅原真理

踏石に映る花影濃紫陽花

寺町知子

友去りし胸の奥まで青紫陽花

菅原靖子

濃紫陽花天に召されし淑女なり

南條さわゑ

紫陽花や下町ゆかば江戸の風

杉浦千祐

千手ひろぐる紫陽花に抱かれて

西幅公子

研修の都度逞しき七変化

鈴木藻好

紫陽花や売れ残りたる鉢ひとつ

野口和子

紫陽花を愛づる羅漢の手には酒

鈴木玲子

木洩れ日や山紫陽花の峠道

野村美子

紫陽花や傘をクルクルミュージカル	畠中風花	いくたびも紫陽花の青愛づるかな	宮崎チアキ
紫陽花や空映したる青が好き	畑宮栄子	紫陽花や忽ち乾くアスファルト	室井早都子
紫陽花のかすかな吐息夜雨しづ	原田秀子	紫陽花やバス待つ吾子の小さき傘	持永喜夫
あぢさゐやをとめ心の花の色	日高道を	暗闇に雪洞のごと七変化	元田亮一
紫陽花や北鎌倉の東口	檜鼻ことは	女の子ばかり集まり七変化	森和子
雨粒に輪郭凜と七変化	平野 楽	道問へば紫陽花の球指す巡査	森下山菜
紫陽花の群れて咲きても涙色	福田千春	バラモンの風紫陽花の咲き誇り	森下美智枝
七変化駄駄捏ぬる子の泣き笑ひ	保坂翔太	小雨降る家並彩る七変化	山岸久美子
はじめの口紅の色七変化	正木萬蝶	大仏を仰ぐ紫陽花人の列	山下ユリ子
紫陽花や五湖を借景する湖畔	松村笑風	庭師より捨てるに惜しい紫陽花と	山戸美子
城跡の白き四葩の花黙す	丸屋詠子	雨の日は紫陽花耐へる身の重さ	山中いちい
御堂へと続く石段濃紫陽花	三浦真由美	紫陽花や幼なじみが艶となる	湯浅 和
紫陽花や雨のあやなす海の青	皆川更穂	紫陽花や雨のあかるき大社	横山君夫

紫陽花の小ぶりや都市にモニメント

吉川拓真

登山電車軋みて触るる四葩かな

岡田宣子

寛解に歓喜の雨の濃紫陽花

綿引まりこ

色恋は形而上学七変化

青木鶴城

紫陽花やさかと抱きし犬が逝く

秋谷風舎

雨の日にひそひそひそと七変化

阿部幸代

土地つ子の守る小杜額の花

荒井俱子

鎌倉の昭和めく店青あぢさゐ

新井のり子

庭角の四葩の花の一雫

飯田忠男

七変化説明出来ぬ色もあり

池田珪子

あぢさゐに花を添へたる雨しづく

池田雅夫

あぢさゐや白磁の壺にあふれをり

石井直子

富士塚の奉納のほり濃紫陽花

石黒由美子

人ひとり通れぬ路地や七変化

石関六弦



山紫集作品評

網野月を

紫陽花は嫌ひ母の忌は大雨 新 暦文

えた一句になっている。「紫陽花」が地球を青く染め出したようにも読めるのである。作者の外世界を描出して、「地球」規模のマクロコスモスを感じ得ている。

上五中七の「紫陽花は嫌ひ」は、俳句にしては強過ぎるくらい断定的意思表示である。ただ、中七座五の「母の忌は大雨」によって受ける強過ぎることもなく、断定ではなくて寧ろ作者の受け身的な感傷なのではないかと感じるのである。

紫陽花の隙間隙間の雨激し 篠原さよ子

この特別なリズム感は一休何であろうか。一句を通じて切れの無いリズムでもあるし、五七五のリズムというよりは十七のリズムのようにも感じるのである。ただ破調というリズムともまた異なる様である。座五の「見る」と「昼餉」の間に切れがあるようにも思われるのがその所以である。「紫陽花」の句では珍しい時空間の捉え方である。

紫陽花の青の世界に踏み込めず 飛永 鼓

座五の「踏み込めず」からは作者自身の意思の他に何か強い外因があるように読める。作者ご自身もその外因を探しているのではあるまいか。至極個人的な内面を描出して、深層心理のミクロコスモスを探求する句である。

紫陽花や青き地球は青きまま 横山 礼子

兼題からは至極当たり前のことなのであるが、「紫陽花」と「青」の句が並んだ。こちらは「地球」規模の大きさを捉

庭中に紫陽花挿して夫逝けり 梅澤 輝翠

「紫陽花」は株分けや取木によって繁殖させるのであるが、挿木によっても増やすことが容易なようである。鹿沼壤など

に挿木するのである。「庭中に」亡くなった連れ合いの挿木した「紫陽花」が根付いている、ということであろう。亡夫の遺してくれたものに丹精した「庭」があるのである。

刺繍花陽に褪せてゆく絹布かな 小林京子

座五の「絹布」は絹織物の着物であろう。「刺繍花」つまり紫陽花を「褪せてゆく絹布」に譬えたと鑑賞した。逆に「絹布」を紫陽花の終いの様子に譬えたと解釈も出来る。紫陽花の関連季語である「刺繍花」の幹旋が効いている。逆説的ではあるが「褪せてゆく」という変化を想起させないで、「絹布」の様子を遠隔に描出しているのである。

紫陽花の太鼓腹めく通学路 石田慶子

「紫陽花」が塀から食み出ているのである。昨年の花期の終えた頃に剪定した筈なのであるが、年を越すと何時の間にか枝を張り、葉は繁茂して塀からはみ出すのである。嫌って剪る方もいらっしやるのだが、情けのある方は今年の花期の終えるのを待つて剪定するようである。作者のポジティブな思いを感じ取ることが出来て、中七の「太鼓腹めく」が言い得て妙である。

電器屋の裏にぼつんと白四葩 樋口元美

実景なのであろう。電氣屋と書かずに電器屋とは珍しい限りだが、これも店舗の看板か何かで観察した実景と思う。紫陽花の花がその店舗の裏に「ぼつんと」咲いているのだとい

うのである。それも白色である。珍しい取り合わせである。作者は何らかの用件で「裏に」回ったのであるが、そこからは物語が紡ぎ出されそうな感がある。家路への日常なのかも知れないのだが、読者に期待を抱かせている。

あぢさゐや三日にあげず引く神籤 遠藤人美

何の願をかけているのであろうか。その社には「あぢさゐ」が咲いているのである。「あぢさゐ」の花色の変化に伴って、毎回引く「神籤」が良い方向へ更新されてゆくのである。やがて「あぢさゐ」の満開色を迎えるときには、「大吉」運を引き当てるであろうという期待感が「三日にあげず」に込められている。

まん丸に見え紫陽花の歪なり 石川理恵

上五中七の「まん丸に見え」と座五の「歪なり」の取合せが妙である。「まん丸に見え」という観念と、「歪なり」という真実の差異を「紫陽花」に見出したのである。いわゆる発見句なのであるが、大きく物事の真偽を言い当てたような語句の強さがある。

界限に寡婦また一人濃紫陽花 本橋稀香

「紫陽花」の花言葉は文化圏に依って異なるようである。色合いによっても幾つもの花言葉があるようだ。その中でも知的、家族、寛容などが目を引く。座五の季語「濃紫陽花」に家族の容態を作者は感じ取ったのかも知れない。

石井喜恵 選

鼓
笛
集

紫陽花や父へ怒りはありません
漣は同心円に植田雨
ビルにビル映りこみたる薄暑かな
快晴や穂波ささやく麦の秋
鯉潮一本釣りの竿撓る
夏場所の力士浴衣の水浅葱
自転車の列追ひ上ぐる青嵐
ただ暑き生家の仏間母の座す
四迷忌や高飛車も良し古書店主
参拝のはや御利益やどちやう鍋

吉川拓真
本橋稀香
石井直子
反町 修
北山建治郎
菅原靖子
丸屋詠子
新井のり子
——以上特選——
田中弘子
石黒由美子

髪洗ふ帯は博多の半巾に
三ノ輪まで三駄歩みて心太
水仙の涸れ葉を迄る芒種かな
香水や明日を語らふ友も無く
濡れてなほ艶めく今朝の七変化
瑞瑞し夜風に薫る新樹かな
縫ひ繋ぐ葉陰ひと針宵螢
五月雨や怯めど明日へ再検査
風薫るトランジスタにF E N
台風来逆巻流る川の渦
子等三人三色それぞれかき氷
ブルースは取りに聴きたし合歓の花
空蟬や生きし証の背の曲り
植ゑ終へて手酌する手の日焼かな
庭を這ふどこまで続く南瓜の花
五月閏柱時計の打つ三時
走り梅雨土のかをりのアスファルト
ハイヌーン酷暑の襲ふ街歩道
泥色の水嵩増して梅雨入かな
シャッターの閉づる軒先燕の子
夏初め藍で迎へる老舗かな
初夏蟬聞き逃すまじ三合目
鉛筆の削り香匂ふ夏の空

三浦真由美
森下山菜
飯田忠男
山下ユリ子
嶋田洋子
倉田星歩
平野 楽
杉浦千祐
石関六弦
綿引まりこ
木村小麦
秋谷風舎
皆川更穂
松村笑風
川島夕峰
室井早都子
樋口元美
鈴木藻好
阿部幸代
武田重子
寺町知子
畠中風花
元田亮一

異国人のハチ公に列風薫る
夕立來農道馬の背となりし
回送のバスを見送る梅雨入かな
人の根は信ずべきもの立葵
鈴懸の径賑はひて薄暑光
後ろへと一本線引く植田かな

木谷葉子
寺内洋子
遠藤人美
関谷多美子
山中いちい
持永喜夫

鼓笛集作品評

石井喜恵

紫陽花や父へ怒りはありません

吉川拓真

この句からは紫紺のあじさいの群れ咲く様子を想像する。
作者の怒りとは、読み手に総ての疑問も答えも委ねている。
中七から下五まで一息で読ませる作句は、作者独得の感性の
表現かと。「紫陽花」の季語で成立する句である。

漣は同心円に植田雨

本橋稀香

小雨降るなかの田植の様子でしょうか。雨粒の作る幾つもの
円の重なる水面が眼前に広がる。美しい日本の原風景です。

ビルにビル映りこみたる薄暑かな

石井直子

林立するビルの街の窓に映っているのはビル許り。索莫と
した都会の無機質な空気感を「薄暑」の季語が支える。

快晴や穂波ささやく麦の秋

反町修

一読、眼前に黄熟した刈入れ間近の麦畑が浮かぶ。「穂波
ささやく」と擬人法を用いているが、「穂波のささやく」と大和
言葉でさらりと言ってみる方法も。

鯉潮一本釣りの竿撓る

北山建治郎

昔から初鯉は珍重されてきたが、竿が撓るほどの大物を釣
り上げたのは作者でしょうか。白波きらめく大海原。勇壮な
大景を詠んだ一句の魅力。

夏場所の力士浴衣の水浅葱

菅原靖子

水浅葱色は緑がかった淡い青緑色で夏の和装には欠かせぬ
色合いです。大銀杏に結い上げた力士の涼やかな浴衣姿。夏
場所の賑わいまで伝わってきます。

自転車列追ひ上ぐる青嵐

丸屋詠子

自転車通学の列でしょうか。青嵐の季語からの清涼な爽快
感が伝わる。「追ひ上ぐる」で若者の希望に燃えた背を見る。

ただ暑き生家の仏間母の座す

新井のり子

仏間は普通家屋の中段の南向きか東向きに位置している。
「ただ暑き」ことであれば多分風通しが悪いのであろう。静か
に座す母の円い背を見つめる作者の慈愛溢るる眼差し。

投句頂いた句の中からひとこと言添えたい作品を。

水仙の涸れ葉を聳る芒種かな

「水仙」「涸れ葉」は冬の季語、芒種は夏の季語。季節を跨いでの使用は避ける。出来れば季語は一句に一語が可。

風薫るトランジスタに F E N

「F E N」とは米軍基地に流れる放送で、ラジオから風に乘って英語の会話や音楽が聞こえて来たのでしょうか。昭和の頃の懐かしい感覚が甦る一句です。

庭を這ふどこまで続く南瓜の花

止めの六音が気になります。「南瓜花」としても良い。或いは、「庭を這ふ南瓜の花の行き処」等。

五月闇 柱時計の打つ三時

柱時計が三時を知らせる。こんな真夜中に起きている作者。季語の「五月闇」の意とする所を読者は色々と想像する。

走り梅雨土のかをりのアスファルト

梅雨時の独特の感覚を強調するなら「土のかをり」よりも「土の匂ひ」とした方が伝わる。

夏初め藍で迎へる老舗かな

この句の藍からは、暖簾或いは浴衣を連想する。

「初夏や老舗三代藍暖簾」とすつきり詠む方法もある。

初夏 蟬聞き逃すまじ三合目

「初夏」「蟬」と季語の重なりが気になる。「蟬の声聞き逃すまじ三合目」で山登りの高揚感は伝わる。

鉛筆の削り香 匂ふ夏の空

「削り香」で「匂ふ」は伝わるので他の言葉に言い換える。「鉛筆の削り香初夏の五時間目」と教室の授業の風景にしてみるのも一考かと思えます。

異国人のハチ公に列風薫る

この句からはハチ公の前で列を作っている海外からの旅行者の姿が見えてきます。しかし異国人のハチ公ではハチ公を連れている異国人になつてしまふ。「風薫るハチ公前に異国人」にしてみるのも。

香水や明日を語らふ友も無く

親しい仲間が亡くなって残された者の淋しさが胸を打つ。それでも「香水」の明るい季語で、作者のこれからの生き方の覚悟が見えてきます。

水 明 例 会

第一例会（浦和）

菅原卓郎
小林京子 報

調律師時時金魚驚かす
水琴窟の調べ届きて宵涼し
夕涼や三味調弦の一の糸
汗しとど朝靄を突く調教場
夏フェスティバル調律の音は山麓へ
手風琴にはづむ歩調やパリー祭
乱調の祭囃子や夜の更けぬ
動かせぬ調度ばかりや大西日
お囃子の調子はなく祭り笛
爪弾きの三味の調べよ夏小袖
正調の八木節音頭夏祭
盲導犬の調教準備雲の峰
雪溪の雫となりぬ空の青
五月雨やシヨパン奏づる調律師

和子
はるみ
延昭
稀香
千祐
卓郎
京子
——以上特選
順子
由紀子
節代
徹平
はるみ
千祐
稀香

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

雪溪に終なき思慕の縹色
雪溪をはるかに見やる山男
青葉風調布町中深大寺
雪溪の斑を見入る農夫かな
ボマードで調髪びたりアロハシャツ
神の手のアシンメトリー梅雨に入る
山滴る開く楳円の曲げわつば
送り梅雨〇と□の広場の絵
四角ピラ平和願ひてツルを折る
Y字路の三角空き地簾の椅子
五芒星の社にたぶん南風
梔子の花錆びてゐる喪の帰り
おもすびは三角がよし夏の山
緑さすトライアングル揺らす庭

和子
チアキ
延昭
卓郎
京子
——以上特選
順子
由紀子
節代
徹平
はるみ
千祐
稀香

第三例会（東京）

五明
淵徹雄 報

母の日や家庭は二等辺三角形
梔子や白といひ切るのは危険
くちなしの匂ひ立つ路地闇夜かな
宵宮やルビーのやうな林檎飴
索麵を大井に夏休み
花嫁は梔子の花綿帽子
くちなしの花錆びて窓閉づる母
くるくるドレスみたいにな花梔子
待ちかねた梔子の花魅惑の香
下町の路地毎競ふ四葩かな
父の日や交はることなき双曲線
雲の峰谷を挟みて背比べ
大西日照らす航跡金波散る

鶴城
——以上特選
峰雄
敏江
千春
亜弥子
いちい
慶子
妙子
恵美子
みどり
鶴城
星歩
〃



一本決めし残心涼を呼びにけり
たつぷりと慈雨を含みし茅の輪かな
西日射す庭に主なき車椅子
サイレンの音へ貼りつく西日かな
天を衝く凱歌西日の甲子園

順子
理恵
徹雄
〃
昇

紅型の鮮やか西日の中で舞ふ
西日射す表参道バリエメきぬ
蒲団ごと西日の赤子次の間へ
水煙を射る西日碎けて光散る
人を愛し人を嫌うて桜桃忌
良き川の流るる街の西日かな
西日背に終業まへの一仕事
作業場の裸電球大西日
白南風や高浪を衝く巡視船

以上特選
萬蝶
千祐
順子
星歩
理恵
康世
雅夫
徹雄
昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

梅雨明や軽やかに鳴る弓の的
今日よりはかるき粧ひ梅雨の明
梅雨明や左官二人の身の熟し
山懐に寄り添ふ五軒梅雨明くる
尖塔に架かる光暈梅雨明くる
黄に溺れ焦げつきさうな向日葵野

昇
由紀子
章子
マシミ
喜恵
〃
以上特選
曆文
延昭

第五例会（浦和）

河野はるみ
岡田宣子 報

公園の木蔭の昼餉梅雨あがる
陽の名残りひまはり畑の黄のうねり
銃口にひまはり挿して仲直り
向日葵に負けぬ農夫の大帽子
我勝ちに向日葵顔を日に晒す
回廊に魚鼓の音弾む梅雨の明
梅雨明けて球児の吠ゆる予選かな
灯台へ宇宙からの使者向日葵立つ
向日葵の迷路に高き子らの声
梅雨明けや磯笛ひよると志摩の海
若者にあつき胸板大向日葵

修
由紀子
行雄
翔太
光子
昇
克己
恵子
章子
マシミ
喜恵

老鶯や溪風通ふ宿浴衣
老鶯や山の暮らしの声の張り
目元に目礼返す夏至の夜
老鶯や山門までのゆるき坂
老鶯や棚田に映ゆる夕日影
洗濯機フル回転の夏至ひと日
夏至真昼ホームの先を歩く鳩

知子
〃
義子
章子
宣子
はるみ
〃
以上特選
義子
千祐
知子
宣子

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子 報

老鶯や明治の森のてつべんに
結願の寺に待ちぬし瑠璃蜥蜴
傾城のごと一瞥や蜥蜴去ぬ
少年を軽くなして蜥蜴消ゆ
色彩と媚態を見せて熱帯魚
夕立あとセピア色く街を行く
宝石箱で眠りし夜の瑠璃蜥蜴
睡蓮のたれも知らない夜の色

はるみ
マスミ
千祐
稀香
京子
慶子
萬蝶
〃
以上特選
月を
はるみ
慶子
千春
京子
千祐
稀香
邦人
マシミ
星歩
詠子
鶴城
ひろこ
佐江
萬蝶

誰ですか忘れものです蜥蜴の尾
蜥蜴出づ井戸端会議中断す
蜥蜴の子祠の横で生まれたの
居住地は小田原城なり青蜥蜴
泰平や蜥蜴の傍を日光浴
温もりに倦むや乙女は蜥蜴愛づ
ひんやりと蜥蜴の鼓動掌に
達磨さんが転んだ蜥蜴の逃げ足
我が庭に住み着く蜥蜴したる顔
何脱む墓石の上の青蜥蜴
夏深し「色即是空」と試し書き
青蜥蜴切り捨てらるるマイノリティ
夏の足に海の青色生ぬるし
大夕焼海の暮色の漂へり
妖かしのくのいちめきて瑠璃蜥蜴

関西例会（大阪） 森本早苗報

すいすいとゼブラゾーンを金魚玉
金魚すくひ子よりも親がしやかりきに
たも網の破れに金魚掛かりたる
ほうたるに誘はれライダー旅立ちぬ
蓮の葉の水玉揺らす子の遊び
淋しさに泡を一つ夜の金魚
能登の海夜釣りの人の中に友
大地轟く六甲山の大夕立

—— 以上特選

夏風邪やテレビ観ながらうとうとと
診察待つ玻璃の金魚に息合はせ
金魚鉢に目高泳がせはしやぐ子等
蓮池を眺め先祖を偲ひけり
デパートのちよつと小洒落たあつぽつぱ
薄れゆく母の面影水芭蕉
蓮の花一緒に撮るよ音したよ
はるかむかし裂かれし恋や月見草
一階へ寝室うつし青簾
ラベルの金魚冷酒の湖を漂へり

和人子
洋子
人美
千枝子
千世子
和子
ノルン
早苗

以上特選
ノルン
和人子
千枝子
さわゑ
人美
嶋田洋子
千世子
洋子
満耶子
早苗

昔話あれこれ 60

丸山マスマ

太政大臣道長

この大臣道長公は、兼家公の五男。
母は藤原仲正朝臣の娘である。生年は
康保3年(966)。

『大鏡』の語り手大宅世継が最も語り
たかった人物である。

道長公は、第66代一条帝、第67代
三条帝の叔父君である。永延元年
(987)、二十二歳の時源倫子と結婚。
翌永延2年参議を経ず二十三歳で権中
納言に昇進した。同年長女彰子誕生。
正暦3年(992)長男頼通誕生。

疫病流行と道長の幸運

正暦5年の頃から、世の中に伝染病
が蔓延し、多くの大臣・公卿がなくな
った。

長徳元年3月20日(旧暦)

大納言藤原朝光公あさてる(藤原兼通の子)

4月23日

左大将なり濟時公なり(藤原師尹の子)

5月8日

左大臣源重信(源雅信・倫子父)の弟

栗田右大臣道兼公(道長兄)

5月9日

中納言源保光公(代明親王の子)

6月11日

大納言道頼(道隆の子)

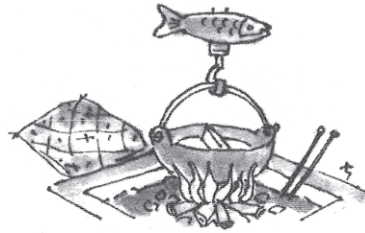
4月10日

道隆公(道長兄) (ただし、この方の死因は疫病ではない)

しかし、二三个月の間にこんなに大勢
の大臣、公卿が一度に亡くなるというこ
とはめつたにない出来事である。

「それと言うのも、道長公が絶頂を極め
るため、皆様方がばたばたと倒れたた
ように見受けられます。亡くなられた方々
がその席順のまま長生きされたなら、と
てもこんなにまで、道長公が御出世され
たかどうか。」と世継の翁は言う。

各地句会



阜月の会 (浦和)

野萱草咲いて此処より別世界
湯上りの稚にやさしき団扇風
浜小屋の物干し竿に若布揺れ
海の日や海軍の叔父安らかに
水無月や国へ帰ると店仕舞
浜焼の烟の匂ふ洪団扇

山菜 光代 珪子 曆文 さいち 更穂

りんどう俳句会 (浦和)

夕風の鳥の窯場の煙かな
青紫蘇の香や縄文の風を呼ぶ
原爆忌手作り品の和蠟燭
仲間から離るる二人夕風の浜
夕風の動かぬ雲の浮かぶ川
青鷺の佇む気品孤高の目
裏門を開くれば香る青き紫蘇
夕風や仮名で泊まる鳥の宿
夕風の水脈の幾筋のぼり船

野ばらの会 (浦和)

振れても芯は真つすぐ文字摺草
振り花遊び疲れた手の中に
逃げる児と追ひかける母天花粉
天瓜粉うつすら残る蒙古斑
振花の螺旋駆け抜け風の行く

俳句の手ほどき (岩槻)

蔵壁に質の一文字鳥茂る
海鼠壁残る城下の道をしへ
田の真中若竹覆ふ一軒家
若竹や親を越えたる知恵の丈
若竹やふはりふはりと衣脱ぐ
若竹や孫が乗り継ぐトラクター

君夫 順子 翔太 夕峰 徹雄 寿夫 風子 卓郎 榮子 夏江 茂子 秀子 みき子 延昭 佐江 徹平 翔太 忠男 幸代

川沿ひの散歩の小径今年竹
序の舞を舞ふがごとくに今年竹
暗がりに浮かぶ若竹ひつそりと
若竹の天をくすぐる穂先かな
伸びきつて若竹いのちあふれけり
納屋壁にグラジオラスの色映ゆる
脱衣所に錆ぶる壁掛け扇風機
朝の魚鼓びびく寺領や今年竹

蘭の会 (浦和)

青本を枕に寝むる土用かな
時空超え虹を渡りて父母に会ふ
土用入食欲そそる旗の揺れ
水田で土用の入りのお弁当
スナックに吸ひ込まれゆく守宮かな
庭下駄に宿の烙印土用明
守宮とは家守森守子守かな
守宮這ふ灯りほのかな大鳥居
夏夕べみな十時打つ時計店
短冊の願ひの叶ふ土用入
何組ふ舌なめづりの夜の守宮
明六つにシャワーを浴ぶる土用かな
きざきサークル (浦和)
ナプキンの白帆を解く夏料理
色のよき漬物も添へ夏料理

美子 桂子 知子 卓郎 久美子 千アキ 更穂 かつ子 さよ子 伸子 小麥 しょうご まりこ 風子 夕峰 寿夫 和子 月子 京子 風舎 俱子 昇

寒天の吹寄せするり夏料理
夏料理大将十八番の浜料理
坪庭へ風入る夕べ夏料理
一口め咽をひんやり夏料理
透き通るものへ箸行く夏料理

鶴川山百合句会 (鶴川)

黒南風や病窓はんやり灯りけり
白南風のなか侏儒と化すわたくし
白南風やグーの形のクリームパン
夏至の日の勝利の杯を飲み交はす
黒南風や琵琶湖疏水を逆撫です
白南風や建具入替へ京町家
梅雨晴間朝の散歩の鉢合はせ
南風立ちてキッチンカーのガバオ飯
黒南風やMRIの野太き音

珊瑚の会 (浦和)

あかときの山が膨む河鹿笛
黒南風や水の澱みし用水路
黒南風やルルドマリアの潮じめり
河鹿鳴く瀬音間近き秘湯宿
露天風呂の長い階段河鹿笛
黒南風や魚臭のこもる築地裏
恰幅よき店主黒南風のお舗
川音はバックコーラス河鹿鳴く
河鹿笛切灯台に人の影

和

啓子
由美子
満智子
和子

若枝句会 (浦和)

父の日や初ボータスでダルマ買ふ
父の日や天に杯捧ぐる夕
夏祭り口一文字紅をひく
水船に右往左往の目高かな
黒南風や物の怪どもも身を屈め
コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)
ゆくりなき再会ひとつ晩夏光
一点の翳りもなく青田澄む
白南風や荒磯に確と朱の鳥居
香水の遅れてかをる夜会巻
白南風や干綱高き漁師町
玲子
まどか

若楠句会 (浦和)

スーツ脱ぎ野良着の夫や茄子の花
かの人とかの地かの時走馬燈
走馬燈宵に華やぐ古座敷
老といふ夢幻の枯野走馬燈
走馬燈男気付けば髪白し
今は亡き父母祖父母まで走馬灯
額の花作業場跡につと咲きぬ
脇役も作法それぞれ新牛蒡
足るを知るやりくり上手茄子の花
ほの甘き夫の作りし梅酒かな
かつ子
喜恵
マスマ
昇
恵子
史代
広子
和子
節代

みどり
敏江
美佐子
貞代
泰生

浮雲の作り笑顔に炎暑かな
作務衣着て寝転ぶ夫や青簾
簾の深き音色や走馬灯
円卓の会 (浦和)
蜻蛉生る翅開くまで街眠る
一夕の深傷つくるふ蜘蛛の糸
提琴の弦の弛みや半夏生
半夏生一転晴るる誕生日
迷ひなき蟻の行軍岩畳
知らぬ間に惹きつけられて誘導燈
片白草無罪の人に拘禁刑
夏至る人事不省の母とあて
一日の記憶をたどる半夏生

昇
洋子
由美子
早都子
俱子

たかな俳句会 (川口)

美津子
楽
弘子
慶子
風舎
京子
操
宏治
葉子
久美子
遠くへは行かぬ旅なり夏帽子
顎紐をきりりと結ぶ夏帽子
鈴蘭にピンクもあると知りたる日
逆上がり初めての日の夏帽子
鈴蘭や家族の声の戻る午後
鈴蘭や甦りたる事故のこと
新樹の会 (浦和)
宵待ちの花街の濁き水を打つ
潮待ちの港の輝濃紫陽花

鶴城
真由美
直子

輝翠
卓郎
道を修

翔太
京子
拓真
月城

義子
みち
小麦
のり子
たみい
鶴城
風子
晃

残されてコップの底のサ克蘭ボ
誰へともなく待合室の扇風機
「待つたなし」大観衆の五月場所
薄暑光待合室の令夫人
待望の棚田の入り日田水張る

めだか句会 (浦和)

清水の煌めき纏ひめだか居り
目高にも兄弟姉妹絆あり
五月雨壊れし樋の刻む音
目高さへひそひそ話ジャズ喫茶
五月雨や未読のままの軍記もの
足し水に誘はれ出づる目高かな
広重の版画さながら五月雨降る
五月雨や長靴今日もスタメンに
五月雨やハチ公像で人を待ち
五月雨や芭蕉に負けちゃう一句
五月雨や揃はぬしづく花の上
聖目に黒石を置くベテロ祭
一推しは三段目なり夏芝居
洋上の台風にある目のすがし

櫟の会 (浦和)

更衣着よか捨てよか迷ひたり
更衣所作も清かに平茶碗
どくだみの根と綱引きの老夫婦

道を
徹雄
清吉
鶴城

眞美子
道代
美津子
楽

六弦
和子
莊志
眞理子
章嘉
惠美子
尚己
月を
はるみ
知子

文子
あつ子
朋子

十葉やかほどに似合ふ青き空
黒髪にメッシュを入れて更衣
十葉の臭ひ残る手厨事

芙蓉句会 (浦和)

葉がくれの青梅少し赤色に
青梅の墜つる小池や無常風
登山地図広げ復路を相談す

水明熊谷句会 (熊谷)

初トマト道祖神にもお裾わけ
バルコンにトリコロールを画学生
夏芝居義理人情の「赤城山」
些と洒落て今朝は露台でカプチーノ
露台へと登りくるかなアンタレス
家宝などなくも露台や星を待つ
情愛にあふるる手紙茄子の花
絶海に時空の止まる露台かな
果物が野菜か惑ふトマトかな
蔓絡みたる露台に曾て独裁者

柿の木塾 (浦和)

叶ふなら鳩の浮巢の仮枕
走り根は地のレリーフや苔の花
沼の中浮巢ちひさく未完成
苔の花膝つきて撮る女人堂

裕誌
富子
千重子

越後の会 (浦和)

税子
美子

茂子
風子

徹平
秀子

忠男
君夫

道子
翔太

卓郎

昇
惠子
章嘉
節代

川舟の竿の先なる鳩浮巢
余りにも浮き巢無防備ご用心

越後の会 (浦和)

遠雷や地図帳ひろげガラパゴス
鎌倉の路地は奥まで濃紫陽花
遠雷や「桑原」唱へ押入れに
雷のあと一時の街モノクロに
紫陽花や明日は娘のウエディング

青葉の会 (浦和)

畑仕事わが足を噛むはぐれ蟻
空きつ腹を流るるごとく冷そうめん
世の習ひ働き蟻の列長し
空元氣出して乗り切る極暑かな
仲間の絆一糸乱れぬ蟻の列
三倍の羽を運びて進む蟻
蟻の列たどりて行けば花の蜜
空曇り佐原の街に花菖蒲
群衆を襲ふスコール去りし空
蟻の群れ子に読み聞かす寓話本
紫陽花や空の青さをもらひをり

小梅の会 (浦和)

梅雨寒の朝ワールドカップの熱量
午睡覚めゆるるカーテンひかりさす

かつ子
和子

知子
眞理
翔太
宣子
輝翠

和子
輝翠
久美子
桂子
公子
美智枝
美紗子
美子
洋子
啓子
眞理

隆文
恵子

行間に思ひを馳せて冷し酒

進

連日の部屋干し重く梅雨入穴

輝翠

今年また会ひに來たのか姫蜚

洋子

高音のサザン聞きつつ夏の空
高塔がサグラダに立つ夏の空
青嵐永川神社のあたりより

啓子
隆然
道を

梅雨穴に落ちて徹子の頭の中に
息かけて水無月食ひし夏越かな
おむすびを転がしてみる梅雨の穴
梅雨の穴丸く切り取る雨戸節

山菜
芳春
月を
喜夫

野菊の会 (与野)
鉢植ゑの色と味良しトマト茄子
出航のエンジンの音明易し
百合の香や突如疲れの沸騰す
合掌す泰山木の開花ぞよ

洋子
廸代

芽吹句会 (浦和)

千重子
おにこ
ひろこ
弘子
修

水明濤つくし句会 (大阪)

智恵子
人美
ノルン
洋子

雛の会 (浦和)
出航の汽笛沁み入る浜昼顔
追憶は佳き事のみを花水
衛兵の直立不動バリー祭
直向きに日がな陽を追ふ日輪草
花水老舗旅館へ老夫婦
熱き砂地のどこまで咲かず浜昼顔
直向きな球児の瞳玉の汗

公恵
喜恵
はるみ
桂子
チアキ
輝翠
佐江

その奥に警策の音五月雨るる
時の日の愛鳥首かしげ眠る
寄り來たる麒麟の首に若葉風
金継ぎの大皿出番初鰹
機首を上げ突入したり夏の雲
不安を晴らす医師のひと言初鰹
正座して「利休百首」や鉄線花
花婿が解体ショウを初鰹
卒寿まで生きて健啖初鰹
欧州の古都に「どすこい」さみだるる

千重子
おにこ
ひろこ
弘子
修

黒髪は風は昭和に花石榴
ぶつかつてくじけてしまふ困鮎
藍浴衣祖母と伯母とが写真にて
鮎釣るや常は短気なあの人が

智恵子
人美
ノルン
洋子

雛の会 (浦和)
出航の汽笛沁み入る浜昼顔
追憶は佳き事のみを花水
衛兵の直立不動バリー祭
直向きに日がな陽を追ふ日輪草
花水老舗旅館へ老夫婦
熱き砂地のどこまで咲かず浜昼顔
直向きな球児の瞳玉の汗

公恵
喜恵
はるみ
桂子
チアキ
輝翠
佐江

不安を晴らす医師のひと言初鰹
正座して「利休百首」や鉄線花
花婿が解体ショウを初鰹
卒寿まで生きて健啖初鰹
欧州の古都に「どすこい」さみだるる

チアキ
富子
久美子
玲子
道を

なごみの会 (浦和)
木道をくの字くの字に菖蒲園
看護学校の齡さまざま額の花
ホスピスの教会の窓七変化
花菖蒲背すじ伸ばして行く二人

喜恵
かつ子
茂子
節代

雛の会 (浦和)
出航の汽笛沁み入る浜昼顔
追憶は佳き事のみを花水
衛兵の直立不動バリー祭
直向きに日がな陽を追ふ日輪草
花水老舗旅館へ老夫婦
熱き砂地のどこまで咲かず浜昼顔
直向きな球児の瞳玉の汗

公恵
喜恵
はるみ
桂子
チアキ
輝翠
佐江

若鮎句会 (浦和)

稀香

和歌山水明句会 (和歌山)

和子

櫻蔭句会 (浦和)

久美子
由紀子
美子
茂子
玲子
行雄

へそ穴は母の花押や天瓜粉
老いの背の斑点増ゆやてんと虫
球体の光くすぐる蓮浮葉
押されつつ富士山頂の御來迎
蜚蝶兵糧丸のごとき静
夏芝に遙か杯へと球競ふ

稀香
貴
ひとみ
秀子
拓真
真

若宮の朱塗りあざやか夏木立
青葉風明け放たれし子の新居
小満や撒花すばやく終列車
和歌まつり葵の御紋かがやきぬ
口笛を吹きつつ山頂めざす夏

和子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ

夏雲を脱けて降下や滑走路
地下鉄にでんと朝顔団十郎
梅雨晴れの水路清らか城下町
眼下には万緑の崖かづら橋
トマト挽ぐ光と若さの匂ひあり
父だけは頑固一徹塩トマト

久美子
由紀子
美子
茂子
玲子
行雄

下車駅は午後の麦秋無人なり
風になり月山下降夏スキー
下船して青葉の五島胸弾む
木下闇何語るらん風ぬけり
我がトマト無骨に丸く青くさく

真理
公子
美智枝
千恵
幸代

りそな俳句会（浦和）
勾玉の出土の丘や風青し
青嵐声の飛び交ふ船溜り
好きといふ二文字飲み込む青嵐
世渡りは上手くなくても水馬
山稜の白き葉裏や青嵐

道を
マスマ
勲
建治郎
雅夫

ミモザの会（横浜）

水に透く金魚たひらに掬はれて
頬杖付き金魚を愛づる母の午後
兄弟がもめて金魚の名付けかな
鉢の中金魚スイスイ何想ふ
水槽の金魚寝てるか泡一つ
出目金を入れて水槽にぎやかに
胸はりて真つ赤な金魚持ち帰る
緑日の肥えし金魚に名をつけり
独り者釣りし金魚と同棲す
泡ひとつ吐くは金魚の嘆きかな

史代
慶子
詠子
栄子
亜弥子
萬蝶
由美子
玲子
美千子
千春

蝌蚪の会（浦和）

打水に消えゆくミツキーマウスの目
水撒や露地に集まる三四人
論争を蒸し返す奴夏暖簾
雑草の蒸し蒸し伸びて梅雨の明け
あはあはと太陽笑ふ大暑かな
熱戦の三十九日打水す
大空の少し波打つ大暑かな
本ちぬや泡雪蒸しを食らひたる
朝つばらから心身ゆるむ大暑かな

元美
ひさの
礼子
五朗
秀子
幸子
風舎
月を
宣子

☆ ☆

風 声

○俳句四季八月号「季語を詠む」欄

雁の使の手甲脚絆に薄埃

鬼之介

○現代俳句八月号「列島春秋」欄

反乱の蟬に一樹の胴震ひ

大橋 迪代

○現代俳句八月号「第三回現代俳句『風を詠む』」欄

田植唄音頭取るのは土の声

染谷 風子

はんざきや我にもありぬ深眠り

永野 史代

木耳の栽培かつての防空壕

茂木 和子

指笛を習ふ少年風涼し

檜鼻ことは

○饗焰（松村五月主宰）七月号「一誌一句」欄

春雨ぼつり祇園甲部に差し掛かり

鬼之介

○くちら（中尾公彦主宰）七月号「受贈俳誌美術館」欄

演目の江戸文字きまり風光る

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）七月号「受贈誌御礼」欄

通ひ路の池の蠢動日脚伸ぶ

鬼之介

○こんちえると（関根道豊版元）六月号「受贈誌紙お礼」欄

記念日の無疵の空よ揚雲雀

鬼之介

春の海潜水艦は似合わない

境 延昭

ドローンを武器とはするな揚雲雀

内田 恵子

ありし日の「草原情歌」春うらら

清水 桂子

定めから逃れしごとく飛ぶや蜂

吉川 拓真

○こんちえると（関根道豊版元）七月号「受贈誌紙お礼」欄

折しもの雨と闘ふ水馬

鬼之介

メーデーの雨の雨粒数へけり

網野 月を

白球のかげろふや一閃の風

秋谷 風舎

鍬入れて土の声聴く穀雨かな

荒井 俱子

雪洞のかすかに揺るる花の冷え

清水 桂子

桜鯛ふてくされ顔姉に似て

吉川 拓真

○雪嶺（石本雪鬼主宰）秋・冬号「受贈誌」欄

その奥にかな女居さうな秋簾

鬼之介

春を告げたる老舗旅館の大振り

々

○菜の花（平賀節代主宰）七月号「諸家近詠」欄

紅梅のさ枝に触るる巫女の袖

鬼之介

○白鳥（高松文月主宰）第八〇号「受贈俳誌より」欄

江戸弁の語りさはやか針祭

鬼之介

○翎（山本一步主宰）七月号「受贈誌の一句」欄

靴跡の窪み大小春の泥

岡本 祥子

（日高道を抄出）

「りんどう忌」のご案内

- 【日時】令和8年9月27日（日曜日） 午前11時受付
午後1時開会
- 【会場】浦和コミュニティーセンター（浦和パルコ10階 第13集会室）
- 【投句】2句 兼題：りんどう忌（かな女忌）、鰯雲（鱗雲可）
- 【参加費】1,000円（昼食はありません、飲み物は各自で持参してください。）
- 【申込み】9月15日（火）までに巻末の申込書に会費を添えて発行所総務部へお申し込みください。

- ◎ 今年（令和8年1月～12月）に米寿（88歳）及び喜寿（77歳）を迎えられる方でりんどう忌の参加者に記念品を贈呈します。申込時に自己申告してください。
- ※ 状況によっては内容を変更する場合があります。
申し込みの無い方の入場はできません。
- ※ 参加申し込みの方で、当日急遽欠席の場合は、下記までご連絡ください。

事業部部長 青木 鶴城
090-6709-1367

好評連載！

はみ出せ！俳句……………夏井いつき
小林秀雄の眼と俳句……………青木亮人
飯田龍太の世界……………廣瀬悦哉

※内容は変更になる場合があります。

特別対談
ロスジェネの咆哮——互いの新句集を読み合う
若杉朋哉×拔井諒一

大特集

濃い句、淡い句
俳句の濃淡に着目し、それぞれの利点と欠点を炙り出しながら、連作や句集の編み方にかかわる部分まで包括的に考える！

結社歳時記

手拝裕任主宰「岬」

巻頭作品50句——三村純也
作品21句——坪内稔典・山下知津子

俳句

9月号 予告

8月25日発売

予価1,300円（本体1,182円）⑩

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（<https://bookwalker.jp/>）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

第 10 回「水明塾」のご案内

【日 時】令和8年 10 月 31 日（土曜日）

◆午前の部

講演（対象：水明全誌友、同人、季音同人）

・講師：高柳克弘氏（「鷹」編集長）

◆午後の部

全句講評講座（対象・水明集作家）

（事前投句：当季雑詠 1 句）

【会 場】浦和コミュニティーセンター（浦和パルコ 10 階）

※詳細につきましては 10 月号に掲載します。

※申込用紙、投句用紙は 10 月号に添付いたします

事業部

水明発展基金御礼（敬称略）

― 令和八年七月三十一日現在 ―

夏行より	樋口 妙子	山戸 美子
丸山 マスミ	1	3
清水 桂子	100	20
平野 楽	3	3
三浦 真由美	1	3
森下 美智枝	1	3
皆川 更穂	1	3
石井 喜恵	1	3
保坂 翔太	1	3
河野 はるみ	3	3
西幅 公子	1	3
日高 道を	3	3
匿名	100	20
武田 重子	1	3
渋谷 きいち	3	3
合計	152	152

後記

九月号をお届け致します。今月号も皆様のお陰を持ちまして、発刊できます。誠にありがとうございます。

八月のお盆休みは日本の慣習的なお休み週間です。勿論、印刷製本業界もお休みになります。つまり何時もとまた異なったスケジュール感で編集作業を進めるということです。新編集部になって九か月が経ちますが、一年を通して経験することの重要性を改めて強く感じています。

七月二十九日、三〇日、三十一日には水明恒例の夏行を開催することが出来ました。主宰特選句も沢山に選ばれました。つまり秀句が出揃って、意義深い夏行となったということです。関連記事は次号十月号に掲載する予定です。ご期待ください。

九月号の近詠欄は「色」のテーマです。七月号以来のテーマ詠を引き継ぎまして、執筆者の二人が共通のテーマを話し合い、共詠し

ております。今後どのような共詠の組み合わせがあるか、どのようなテーマが繰り出されるか見逃せないところです。

九月号の「新珠賞受賞者ノオト」におきましては、皆川更穂さんと穴戸洋子さんの自選二十句をはじめとする企画が組まれています。こちらにも読みごたえのあるものになっております。

さて夏は俳句の季節です。何れの歳時記を見ても夏の季語が最も多いように思います。講談社刊『日本大歳時記』は「季節別季語目次」付ですが、このページを繙いていただければ明らかに夏の季語が多いです。他の季節よりも二割から三割ほどは多いでしょう。それだけ夏は俳句の題材が多いということでも多くの俳句が夏季に生み出されてきたということでしょう。この猛暑から身を躲しつつ、大いに作句に励みましよう。もちろん熱中症にならない程度にです。まだしばらくは暑気が続きます。御身お大切にお過ごしくださいませ。

(月を)

今月のはてな？

大斎原（おおゆのはら）
金団（きんとん）
光暈（こううん）
漁（すなど）る
淡冶（たんや）
郭熙（かくき・かつき）
襯衣（しんい）
雌鯛（めごち）
怯（ひる）めど
少閑（しょうかん）
襦袍（じうほう）

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内をお願いします。)

56 46 42 〃 〃 〃 30 24 〃 17 10 頁

水明

令和八年九月号
通巻一一五二号
令和八年九月一日発行

発行所

〒330-0064
さいたま市浦和区摩西一〇二二
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人

山本 鬼之介

印刷所

中央 美 版

令和 8 年「りんどう忌」

参加申込書（申込締切 9 月15日（火曜日））

りんどう忌 9月27日(日)	参加費 1,000円	出 席
今年米寿(88歳)又は喜寿(77歳)を迎える方は右のどちらかを○で囲んでください		米 寿 喜 寿

※「出席」を○で囲んでください。

上記参加費 1,000 円を添えて申し込みます。

令和 8 年 月 日

住 所	〒		
氏 名		電 話	

申込書送付先

〒330－0064

さいたま市浦和区岸町4－10－21 水明俳句会

[緊急連絡先]

電話番号	－ －
電話所有者	

※緊急時に備えて緊急連絡先をお届け下さい。
緊急時のみに使用し、他の用途には使いません。

季音 雪・月・花

十一月号 九月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏 名 (排 号)

題

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧に書きお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先 (電話番号)

氏名 (本名)

年齢

歳

きりとりせん

十二月号
九月十五日締切

都・市・町・名	都 市 町
氏 名	姓
名 (排 号)	名

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

[illegible]

氏名（本名）

歲

山
紫
集

十二月号 九月十五日締切

氏
名
(排
号)

十二月の兼題

「秋刀魚」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って
使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳

鼓笛集

十二月号 九月十五日締切

※当月は石井喜恵選です。

※当季雑詠で一句を投句ください。

※投句対象者 水明集の同人に限ります。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※最上部の枳から間を開けずに楷書でお書きください。（鉛筆書きは不可）

（注意） この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

氏名（俳号）	

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢

歳

きりとりせん

水
明
通
信

都市又は府県名	姓並びに俳名
---------	--------

通信欄
(近況・感想などご自由にお書き下さい)

[illegible]

送り先 〒三三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四―十一―二 水明発行所

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -

[illegible]

季音抄

山本鬼之介

蘭鑄や舞台衣装はこれと決む
青紫蘇の香や縄文の風を呼ぶ
落日や浮巢の卵金色に
夜の部に連獅子街に青嵐
せせらぎに卜書を添ふる河鹿笛
我独り銀河鉄道待つ露台
睡蓮のたれも知らない夜の色
提琴の弦の弛みや半夏生
産土の杜を占めたる蟬時雨
片蔭や人の暮らしに陰と陽
テールブルに夢二の画集さくらんぼ
誰へともなく待合室の扇風機
四畳半無断で覗く大西日
手踊のさんさ時雨よ船遊
蜻蛉生る翅開くまで街眠る
水無月や熊手の描く礫の波
夕風の磯根漁るさつぱ舟
声までも別人になるサン格拉斯

大橋勉代
大場順子
大村節代
菊池ひろこ
五明昇
近藤徹平
正木萬蝶
日高道を
松宮保人
青木鶴城
檜鼻ことは
曲淵徹雄
渋谷さいち
染谷風子
梅澤輝翠
越田栄子
菅原卓郎
新暦文

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に
鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック▼

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆▼

テーマ…自由

枚数…二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

老舗へと四葩を辿る小網町
話し出しさうな遺影や鶴の夜
夏嵐流線形の雲飛ばし
神さぶる泉を掬ふ手の容
走り根は大地を掴み花は葉に
はちきんの飲みつぷりよし初鰹
桐の花紫だちて空へ空へと
里山の別れ道なる桐の花
奔り来る棚田の風を鯉のぼり
また空の狭くなる街青嵐
父の日や久に父の名書いてみる
江戸つ子の立ち居振る舞ひ初鰹
滴りやいづれ世に出て大河なす
一日ひとつ小さき畑の苺かな
赤ゑんどう足して餡蜜定まれり
立ち漕ぎで上る坂道五月富士
スナックに吸ひこまれゆく守宮かな
夏めくや夫婦似てゐる町中華

杉浦千祐
本橋稀香
倉田星歩
丸屋詠子
反町修
寺町知子
阿部幸代
飯田忠男
田中弘子
室井早都子
内田章子
平野 楽
森下山菜
川島夕峰
皆川更穂
元田亮一
綿引まりこ
石関六弦

水 明 例 会 案 内	句 会 名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅 原 卓 郎 小 林 京 子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網 野 月 を	山 中 み どり 青 木 鶴 城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京 橋 区 民 会 館	山本鬼之介	五 明 昇 曲 淵 徹 雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石 井 喜 恵 反 町 修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水 明 発 行 所	山本鬼之介	河 野 は る み 岡 田 宣 子
	若松例会	第1土曜・午後1時	京 橋 区 民 館	山本鬼之介	正 木 萬 蝶 石 田 慶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守 口 市 文 化 (セ)	大 橋 勉 代	森 本 早 苗

水 明

令和八年九月一日発行 毎月一日発行

(第九十九巻 第九号)

定価 一〇〇〇円